

新しい視点で日本近代史を学ぶ  
新・日本の近代史

# 米騒動と大正デモクラシー

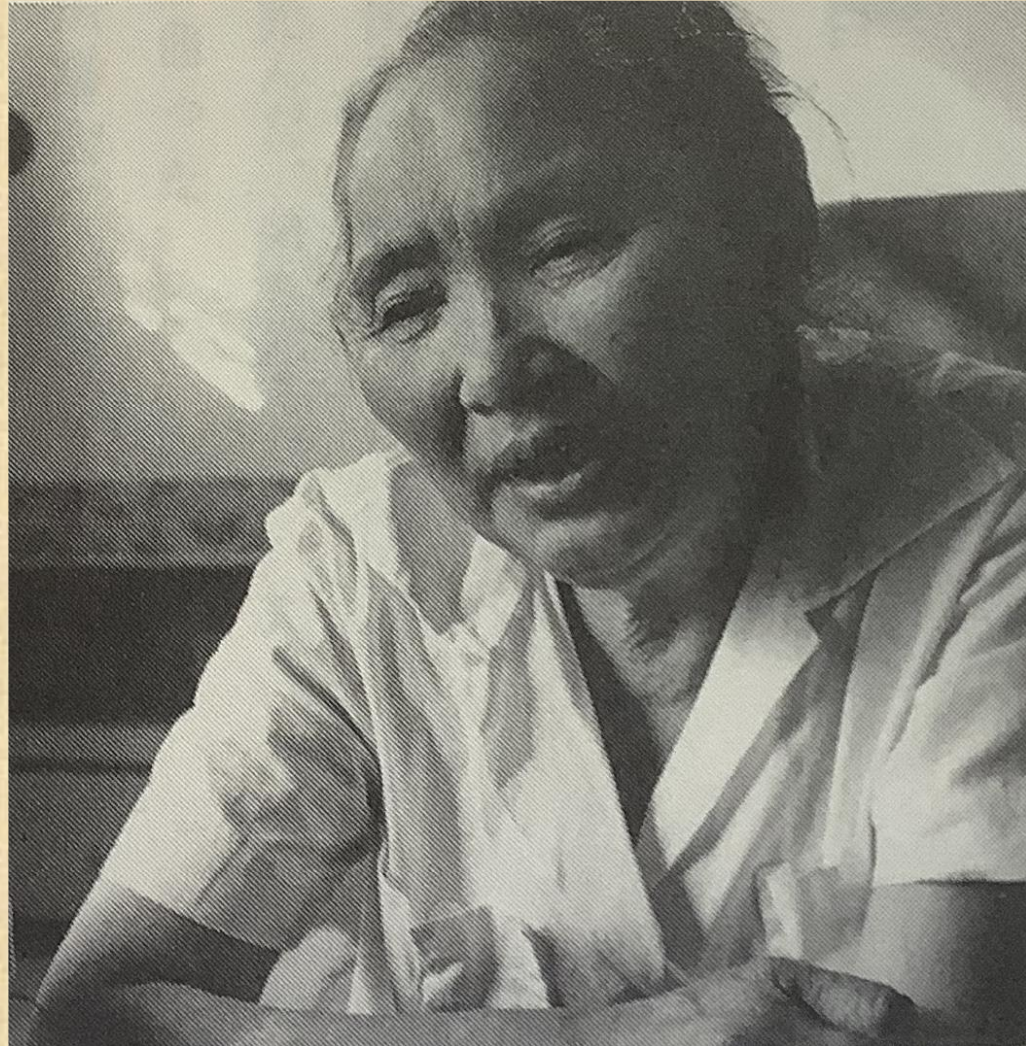
～人間らしい生き方を求めて～

(<http://jugyo-jh.com/nihonsi/>)



# I、はじめに

## 高井としを、一枚のビラが生き方を変えた



### 闘う女の一生

大正十四年に出版され、空手初段の格闘家として知られる高井としの自伝。その内容は、大正時代の社会情勢や女性の地位向上の歴史を、作者自身の体験を通じて描き出している。本書は、女性の権利を求め、社会の改革を訴える闘いの軌跡を、生々しく描き出している。作者は、大正時代の社会情勢や女性の地位向上の歴史を、自身の体験を通じて描き出している。本書は、女性の権利を求め、社会の改革を訴える闘いの軌跡を、生々しく描き出している。

### 女工哀史共作者の思い出記録

大正十四年に出版された『女工哀史』は、当時の女工の生活実態を暴露した社会問題小説として大々的ヒットを記録した。本書の共作者である高井としは、本書の出版を機に、自身の生き方を変え、社会改革を訴える闘いの道を選んだ。本書は、当時の女工の生活実態を暴露した社会問題小説として大々的ヒットを記録した。本書の共作者である高井としは、本書の出版を機に、自身の生き方を変え、社会改革を訴える闘いの道を選んだ。



# 高井としを(1902~1983)の生涯

明治35年岐阜県揖斐川上流で炭焼き堀六之助の次女として誕生

→下宿住まいで小学校へ、**小学校は3年までしかいかず。** 妹弟があいついで死亡  
大正3年~岐阜・大垣の紡績工場をきっかけに、大和郡山、岐阜と工場で**女工を転々**  
→**婦人公論や改造**(ボーイフレンドからもらった)をよむ

大正9年**名古屋・豊田織機でストライキに遭遇、吉野作造の文章をよみ東京へ**

→東京、紡績工場を経て東京モスリン入社

大正10年**ストライキで待遇改善要求の演説**

→**労働学校で安部磯雄、吉野作造、山本宣治らの講義を聴く**

大正11年 **細井和喜蔵と知り合い、「女工哀史」執筆に協力、結婚**

14年 **細井「女工哀史」出版、細井死亡、長男を早産・死亡**

昭和2年労働運動家高井信太郎と再婚、関西へ→高井、何度も投獄される

昭和21年高井、空襲の火傷が原因で死亡→**5人の子とともに、ヤミ市・ニコヨンで生活**

昭和26年**自由労働組合を結成、委員長**に=日雇健保制度化、教科書無償化など尽力

昭和56年**自伝「わたしの『女工哀史』」出版**

昭和58年死亡(81歳)

# 女工の表情・動作・ことば

## ～「女工哀史」にみえる女工像～

多くは十代の  
少女たち！

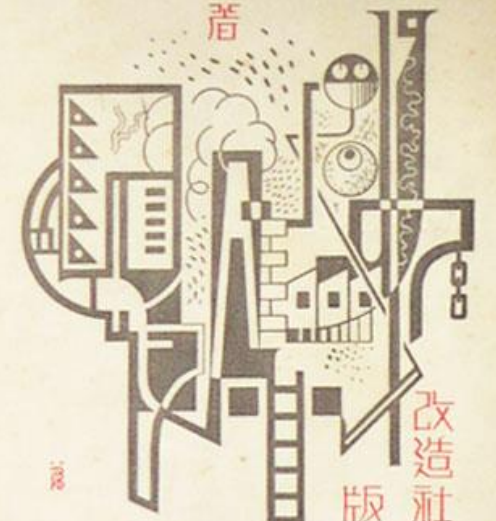
- ①彼女たちの顔は非常に暗い。
- ②彼女たちはいじけている。そして物事をなすにあたっておつくふらしいしなをみせる。
- ③ごく些細な事柄で怒った場合、普通人の倍くらい嫌みな目つきをする。それが対人的であった折には、いつまでも白眼を三角にして相手をにらみつける（後略）
- ④別段おかしくない事柄を、実にキヤラキヤラと笑いこける。そうしてそのまた笑い方が一種特別にげさく（下作。下品）なのである。
- ⑤ことのほか猜疑心が深く、嫉妬心に富む。

細井は、このように女工たちを暗い表情にし、下品で嫉妬深くしてしまった紡績資本家の苛酷な搾取と虐待を断罪し、告発している。（中村政則）

## 女工哀史

細井和喜蔵

著



### 女工哀史

細井和喜蔵 [1897-1925]

1925年改造社刊。14歳に機屋の小僧になって以来、紡績工場の下級職工としての経験と見聞に基づいて書かれた紡績・織布女工の生活記録。大正期の悲惨な女工の労働状態をなまなましく伝える貴重な資料。



# 少女時代のとしをの自己評価

12歳で紡績工場に(日給13銭＝米1升・卵5～6個)、逃げ出す  
大和郡山の綿織物工場、朝鮮人労働者となかよしに、3ヶ月でやめる  
岐阜の日本毛織につとめるが、母の死をきっかけにやめ、  
名古屋の豊田織機に。

私は小学校にも行っていないし、女の子ですから自分の容貌のことも気になったし、人より背も低いし、人よりも自分は劣った者のように思う、ひがんだ根性があったわけですね。それで、なにかもいやで、仕事でも投げやりだったし、自分がそういう考えだから、友だちもあまりできなかったし、まあ、どっちかということ、人に嫌われる娘だったわけね。

こうしたなか、豊田織機で二日間のストライキ発生。  
大日本労働総同盟友愛会のオルグからもらった謄写版刷りのそまつな一枚のビラが彼女の運命をかえる。

## わたしの「女工哀史」

高井としを 著

女工哀史

高井としを 著



『女工哀史』の著者  
細井和喜蔵(1897-19  
25)の妻高井としを  
(1902-83)の自伝。  
10歳で紡績女工にな  
り、労働運動を通じ  
て和喜蔵に出会い、  
事実上の共作者とし  
て夫の執筆を支えた。  
戦争を挟んだ貧しさ

こんな人生があったなんて！  
むしろ「**女工快史**」と  
呼びたい、闘う女  
70年の記録。——斎藤美奈子



岩波文庫

定価(本体780円＋税)

高井としをの自伝。十歳で紡績女工になった著者は労働運動を通じて和喜蔵に出会う。大正昭和の時代、貧しさのなか、ヤミ屋や日雇いで子を育てながら、福祉を求めて闘いつづけた生涯の貴重な記録。(岩波文庫2015)

# 高井としをの運命を変えた吉野作造の論文

18歳の女工堀としをがもらったビラに掲載された吉野作造の論文。としをが語ったその骨子。

「だれでも人間は全部平等で、個性と人格、人権があることを、各個人が気づかず、知らずにいる。一人ひとりが自分の個性にあった仕事や学問をして、社会のためにも自分のためにも幸せな生活をする。自分を大切にする。そして他人を尊重する。労働者は話しあい、学びあい、団結することによって生活の向上が出来る。学者も医者も政治家も個性の発見に努力せよ、団結せよ。自己の尊さに目覚めよ」

私に魂を入れてくださった吉野博士の論文は、私の生きるための、一生の神様だったので。私は貧乏だった。差別された。考えてみればひとつもいいところなかった。そして、いつでも苦しいとき、悲しいとき、もうダメだと思ったときに、私の心の中に吉野博士の呼びかけの文章があったのです。（高井『わたしの「女工哀史」』より）



# 一躍、東京に、模範工となる

そのビラを読んだとしをは、その夜の内に、母が病気と偽り、身の回りのものを売りはらって旅費をつくり、夜汽車にのって上京した。

紡績工場につとめるが、耐震構造に不安を感じ二日で退社、亀戸の東京モスリン工場に泣きついて入社。

だれにも好かれる労働者になろうと、猛烈に働き模範女工となる。

その一方で、「世の中の不正や間違いを正すためには、自分で勉強をし」たが、「団結して何を、どうたたかえば良いのか、よくわからないので」、日曜日には図書館に通い、夜も廊下の裸電球の下で本を読みつづける。メーデーにも見学に出かけた。

こうしたなか、工場でストライキが発生、執行部やオルグの方針にピンとこないとしをは、思わず演壇に飛び出して演説する。

# ストライキの組合集会で演説をする。

大正10(1921)年3月東京モスリン工場でストライキが発生する。

1000人近くが集まった大会が開かれた。そこでなされる演説は「難しくよくわからない」し、要求もピンとこない。そこでたまらず、みんなの前に飛び出した。

みなさん、**私たちも日本人です**。田舎のお父さんやお母さんのつくった内地米を食べたいと思いませんか。たとえメザシの一匹でも、サケの一切れでも食べたいと思いませんか。街の人は私たちのことをブタだ、ブタだといいます。なぜでしょう。それはブタ以下のものを食べ、夜業の上がりの日曜日は、半分居眠りをしながら外出してのろのろ歩いているからブタのようだというのです。私たちも日本人の若い娘です。**人間らしいものを食べて、人間らしく、若い娘らしくなりたい**と思いますので、食事の改善をいたしましょう。

その要求は次の日、いなり寿司が昼食にだされ、次の日はイワシの焼いたのなぞがだされて、カツ丼やカレーライスなどが食べられるようになりました。やっぱりひとりでは何もいっても弱いが、団結すれば要求のたったひとつでも通すことが出来るとわかりました。



# としをと「女工哀史」

大正11(1922)年5月、病気をおして原稿を書いている**細井和喜蔵**と知り合い、友情結婚。

**としを**が働き、細井が家事を受け持ちながら、執筆活動をつづける。

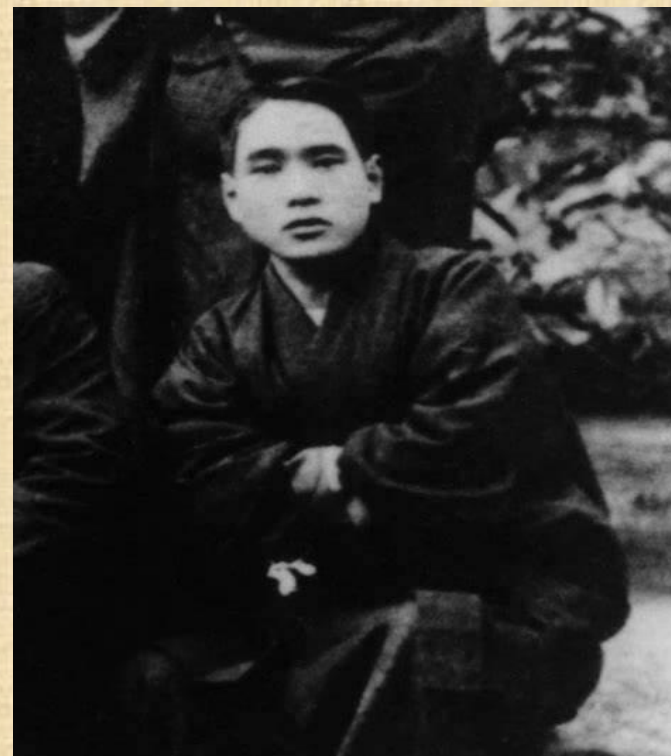
こうして「**女工哀史**」が完成する。そのなかには**としをの体験が多く含まれており、共作者との評価も可能。**

大正14年、「女工哀史」出版、細井死亡

のち**としを**は組合活動家高井信太郎再婚

昭和21年 信太郎が空襲のやけどが原因で死亡

⇒担ぎ屋・ヤミ市を経て、ニコヨン（日雇い労働者）で5人の子どもを育てながら、伊丹市で自由労働者の労働組合を結成、初代委員長に。



細井和喜蔵(1897-1925)

14歳ころから機屋の小僧になって以来約15年間紡績工場の下級職工として働いた経験と見聞に基づいて『女工哀史』を執筆・発行した。その中には1922年に結婚した高井としをの工場での体験も多く生かされている。

# としを、そして民衆を動かしたものの

①小作争議の指導者も、いずれも働き者（精農）で、よく弁が立ち、また楽天的性格の人が多い。⇒としをもこういったひとり

「たいへん働き者で、勉強家でもあり、自己を律する能力を持っている。」＝「通俗道德論」（安丸良夫）

②きっかけとなったのは、進歩的知識人の思想や演説に触れたこと。  
「進歩的思想に触れたとき、受け手の側にその主体的条件が熟していると、かならずそこに火花（スパーク）が起こる。そこに飛躍が起こる」

＝大正デモクラシーという時代的思潮（民本主義・社会主義）

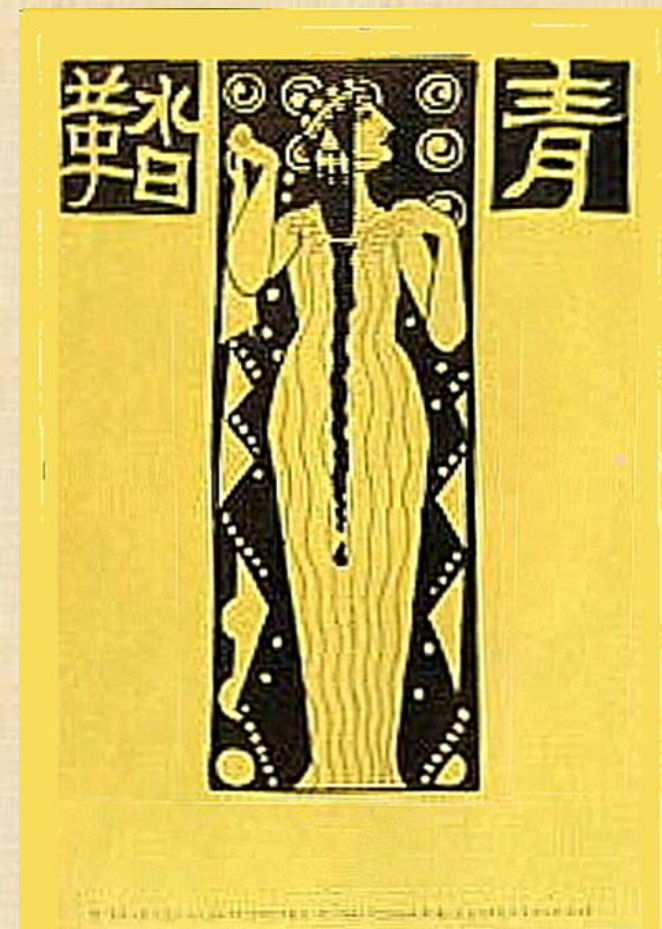
③新たな知識に触れることで、自らの立場を社会という枠組で考える機会をもった。そして人間としての尊厳、労働者や女性のおかれている立場、学び、団結し、たたかうことの意味を考えることが出来た。

＝即自的立場（「存在」）から対自的認識（自己認識）に

大正デモクラシー＝人びとが自らの尊厳に気づき、国家・社会の一員という意識を背景に、世の中の非合理にたいして異議申し立てをしはじめた時代、運動。



## Ⅱ、「明治の精神」に対する異議申し立て ～『白樺』『青鞥』の時代～



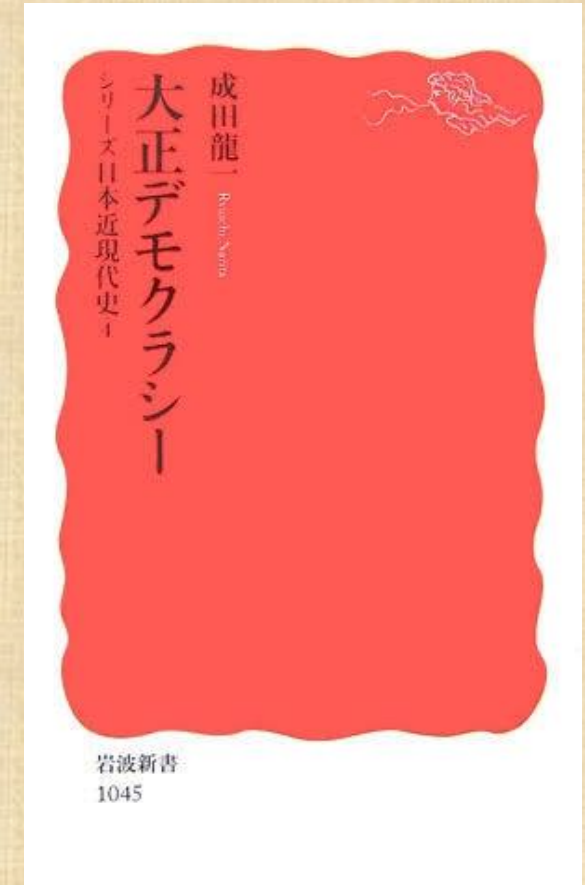
# 「国民」が藩閥に叛旗を翻す… 成田龍一「大正デモクラシー」

「大正デモクラシーとは、その出発点においては、「帝国」に成り上がった明治日本が、従来の構造では対応できなくなったことに由来して起こる運動の総体となっている。

さまざまな階層によって、旧来の社会構造と秩序に対抗して展開された運動であった。」

「各層が…「**国民**」を語り出し、「**国民**」と名指しされるにいたる。

「**国民**」が跛行的に、つまり不完全な形で形成されながら、藩閥に叛旗を翻す事態となっているといえよう。」



成田龍一『大正デモクラシー』（岩波新書2007）



# 「明治の精神」への異議申し立て

## ①津田左右吉の皮肉…**個人の人格を立派にすること**

祖先崇拜を維持するには、1は親より子が、子より孫が馬鹿になること、2は世の中を封建制度・世襲制度に後戻りすること。**最良の策は個人の人格を立派にすること**

## ②田岡嶺雲の問いかけ…**無限定に「善」とされる「文明」は人間を解放したのか、新たな抑圧や疎外をつくったのではないか。**

文明は「偽善・拝金・奢靡・淫蕩・法治の名を借りた形式主義、「人を起立器械とする」憲政・優勝劣敗・平等の名のもとでの富閥専制」

## ③無政府主義者…**天皇制の強権支配に、相互扶助を原理とするユートピア構想を対置させる…政治への絶望と直接行動論⇒大逆事件で壊滅**

## ④自然主義文学…**天皇制のおしつける道徳に、肉体をもって反抗**

田山花袋「布団」…女弟子への愛欲の赤裸々な告白＝世の醇風美俗への挑戦の側面

**「家との葛藤は近代日本の一大テーマをなすが、それに当たって個の解放に…大きく手をさしのばした」**  
(鹿野政直「大正デモクラシー」)

# 「明治の精神」への異議申し立て 『白樺』と武者小路実篤

## ①1910(明治43)『白樺』発刊

おもに学習院に学ぶ上流階級の二代目たちが発刊

国家をものともせず「自分勝手なもの」=精神世界の華麗な展開を実現する

かれらが主張したのは「個人の権威の確立、ことに国家を卑小なものとし個人を至高のものとする認識であった」(鹿野政直)

## ②武者小路実篤＝「自己を生かす」思想

「自己の如く隣人を愛するといったって、第一自己を愛することを知らねば始まらない」

強烈な自己肯定の精神⇒国家至上主義に対抗する



### 『白樺』創刊号(1910)

「白樺は自分たちの小さな力でつくった小さな畑である。自分たちはここに互いの許せる範囲で自分勝手なものを植えたいと思っている。」



# 「明治の精神」への異議申し立て 『青鞥』の発刊(1911M44)

『青鞥』…知識階級の若い女性による、女性自身による文学集団として発足。

創刊号…長沼(高村)智恵子の表紙・与謝野晶子の詩「そぞろごと」、平塚らいてうの巻頭言

元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。  
今、女性は月である。他によって生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。平塚らいてうの巻頭言(「青鞥宣言」)

青鞥のめざしたもの…「他によって生きる」状態からの女性の解放、「潜める天才」の発揮。(鹿野)

世間からは、一種の“悪魔”の出現とみなされ、  
「新しい女」との蔑称をうけ、関係者は抑圧を受ける



『青鞥』創刊号(1911年)  
山の動く日来る  
かく云へども人われを信ぜじ  
山はしばらく眠りしのみ  
その昔において  
山は皆火に燃えて動きしものを  
されど、そは信ぜずともよし  
人よ、ああ、ただこれを信ぜよ  
すべて眠りし女  
今ぞ目覚めて動くなる  
(与謝野晶子)

# 「明治の精神」への異議申し立て 平塚らいてう「新しい女」

わたしは新しい女である。(中略)

新しい女はもはやしいたげられる古い  
女の歩んだ道を黙々として、はた唯々  
として歩むに堪えない。

新しい女は男の利己心のために無智に  
され、奴隷にされ、肉塊にされた如き  
女の生活に満足しない。

新しい女は男の便宜のためにつくられ  
た古き道徳、法律を破壊しようと願っ  
ている。

(中央公論T21号)



平塚らいてう 1886～1971  
日本女子大卒、「三四郎」の  
美禰子のモデルといわれる。  
漱石の弟子森田草平との心中  
未遂事件ののちの苦境の中で、  
自らの結婚資金を原資に雑誌  
「青鞥」を発刊した。



# 文学運動から女性解放運動へ

## 「新婦人協会」と婦人参政権運動

①1913(T2)青鞥社、社則変更＝「女子の覚醒を促」す  
女性問題誌へ

②**新婦人協会**(1920T19)

女性の政治的・社会的自由を確立させるための日本初の  
婦人運動団体として設立、平塚・市川房枝・奥むめお

きっかけ、愛知県内の繊維工場の女工の状態

**女性の政治参加や母性の保護などを要求**

⇒1922年治安警察法第5条(女性の集会・結社への参  
加禁止)改正を実現

③1924年**婦人参政権獲得期成同盟会**(**婦選獲得同  
盟**)…久布白落実・市川房枝ら、参政権実現に焦点を当て、  
大同団結をめざした。



新婦人協会の設立(1920)

①平塚らうてう ②市川房枝  
③奥むめお

治安警察法(改正前)  
第五条 左二掲グル者ハ政事上ノ結  
社ニ加入スルコトヲ得ズ。  
一 現役及ビ召集中ノ予備後備ノ  
陸海軍軍人 二 警察官 三 神  
官神職僧侶其ノ他諸宗教師  
四 官立公立私立学校ノ教員学生  
生徒 五 女子 六 未成年者  
七 公権剝奪及ビ停止中ノ者  
女子及ビ未成年者ハ公衆ヲ会同ス  
ル政談集会ニ会同シ、若クハ其ノ  
発起人タルコトヲ得ズ：  
(官報)

# あらたな「民主政治」をもとめて 吉野作造の「民本主義」

「普通選挙にもとづく議会で、多数派が責任内閣制を実現すれば、明治憲法下でも国民本位の政治（「人民による、人民のための政治」）が実現する」と主張。

- ①「**民本主義**」…世界の民主主義の潮流に学び、明治憲法体制に即した日本の民主主義のありかた。
- ②主権論をさける＝憲法上の主権者は天皇であり、国民を主人公とする「民主主義」はなじまない。
- ③しかし、**普通選挙制を実現し、議会で多数を得た政党が政権を運営すれば、国民の意見を反映した国民本位の民主的な政治が実現できる。**
- ④国家論を避け実現可能性をもとめる形式論。



吉野作造（1878－1933）  
宮城県生まれ、キリスト教徒。東京帝大教授。民本主義をとなえ、大正デモクラシー運動の理論的指導者となる。マルクス主義とは一線を画しながら、労働運動、朝鮮の学生運動などを支持した。



# 大正デモクラシーの理論的根拠

## 美濃部達吉「天皇機関説」

国家全体を法人とみなし、天皇はこの中の最も重要な「機関」であるが、あくまでも国民が選挙によって示した意思、議会に反映された国家意思に従わねばならないと主張。

①天皇機関説＝美濃部達吉によって行われた明治憲法を立憲君主制の憲法として読み替えた「解釈改憲」

⇒大正から昭和の初めまで憲法学界の通説となる。

②憲法の「天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総覧シ、此ノ憲法ノ条規ニ依リテ之ヲ行フ」(4条)の解釈を読みかえる。

③最終的には「議会を通じて示された国家の意思に天皇も従うべきだ」と論じる

④護憲運動の「護憲」はこのような読み方をした明治憲法体制を守れという意味。

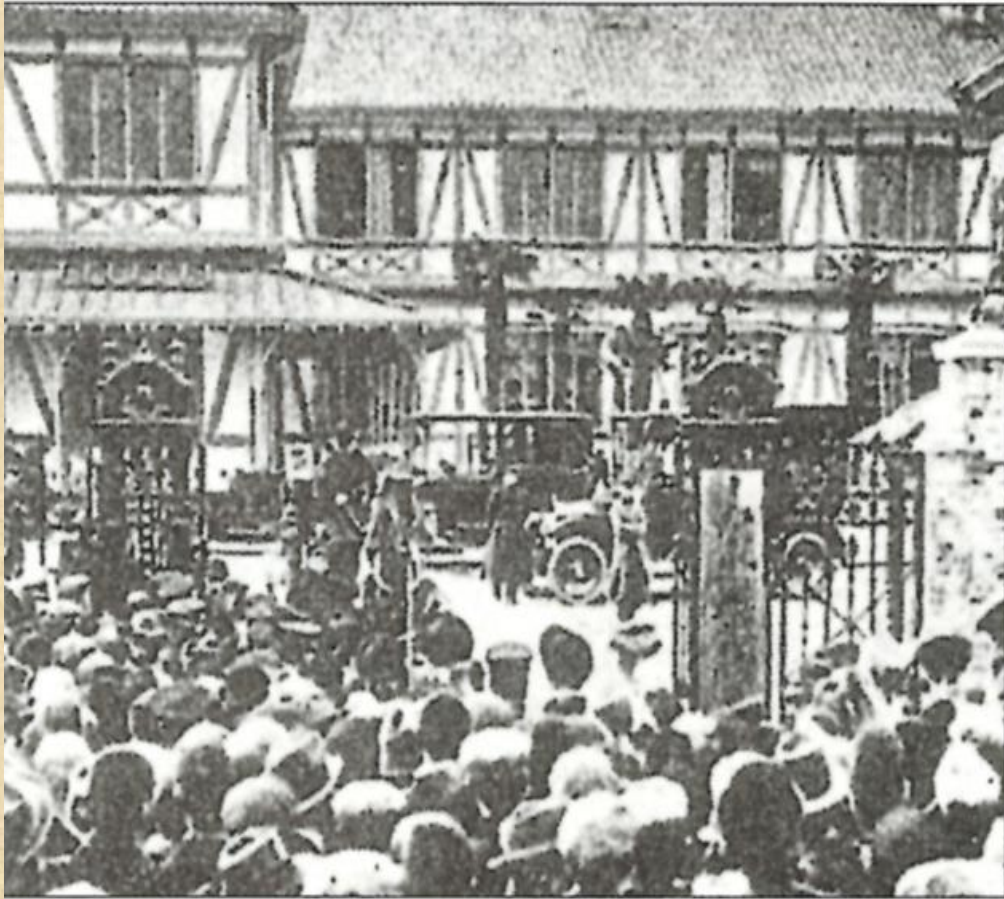


美濃部達吉（1873－1948）兵庫県出身 東京帝大教授、のち貴族院議員。著書「憲法講話」で天皇機関説をとなえた。のち貴族院議員となるが、その説は不敬であると攻撃され辞職。著書も発禁に。



# Ⅲ、大衆による異議申し立て

～日比谷事件から普選運動へ～



増税反対  
国民大会  
於日比谷公園  
二月十一日午後一時

来会者心得

- △凶器一切携帯すべからず
- △石油とマッチ棍棒の用意すべからず
- △警官と衝突すべからず
- △交番焼打すべからず
- △電車焼打すべからず
- △国会議事堂に投石するべからず
- △増税案賛成議員政友会員を毀打すべからず

右注意すべし



# 動き出した民衆～暴動事件の多発

- ① 1905 **講和条約反対運動（日比谷焼き打ち事件）** = 非主流派の政治家
- 1906 **東京電車値上反対運動** = 社会主義者と自由主義者の共闘⇒電車焼き打ちに
- 1908 **増税反対市民大会** = 市電焼き打ち、投石
- ② 1912 **第一次護憲運動** = 犬養・尾崎ら政治家＋記者＋インテリ⇒第三次桂太郎内閣崩壊
- 1913 **対支問題国民大会** = 中国に対する強硬政策を要求した国民大会が暴動化
- 1914 **シーメンス事件** = 犬養・尾崎ら反政友会の政治家＋記者  
⇒大隈重信内閣成立、疑似政党内閣
- ③ 1918 **米騒動** = 民衆の自然発生的暴動⇒新聞で全国化  
⇒寺内正毅内閣崩壊・原敬政友会内閣成立
- ④ 1918～**普通選挙権獲得運動**  
= インテリ＋労働組合＋政治家⇒報道
- ⑤ 扇動の中心としての**新聞・ジャーナリズム**  
担い手の中心としての**都市雑業層**⇒労働者やインテリ  
政党主流派⇒**利用するが、応えようとせず危険視**  
体外硬派＝右派ポピュリストの煽動も⇒**好戦的傾向**



第一次護憲運動にともなう暴動で  
焼き打ちにされた上野署

# メディア＝新聞が民衆暴動を主導

## ①大阪朝日新聞…営業方針としての「反権力」?!

鳥居素川を主筆に抜擢（政論紙「日本」出身）

＋長谷川如是閑・大山郁夫

さらに吉野作造・河上肇らの記事を連載

→閥族政治批判、民本主義や社会政策などを強く要求  
シベリア出兵反対、米騒動にも同情的な紙面

## ②1918 白虹事件をきっかけに政府に屈服

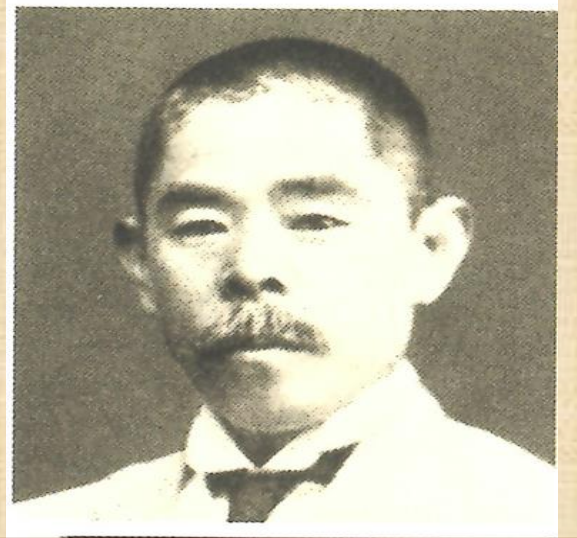
政府＝検察…米騒動にさいしての「白虹、天を貫く」の  
一文を不敬罪＝発行禁止の容疑で脅す

⇒大阪毎日など他社…政府の朝日新聞攻撃に協力

朝日新聞社…村山社長辞職、鳥居ら関係者の退社、

原首相への謝罪、

新たな「編輯綱領」発表…「不党不偏」を社是とする



鳥居素川(1867～1928)

新聞キャンペーンが語るのは、「腐敗宰相」「閥族」などの悪玉を正義の「国民」あるいは新聞自身が懲らしめるという一種の道徳劇であった。そこでは「閥族」などに対し読者の道徳憤慨・正義感が爆発するが、そのエネルギー源となっているのは日常的生活中で蓄積されているさまざまな不平・不満であった。

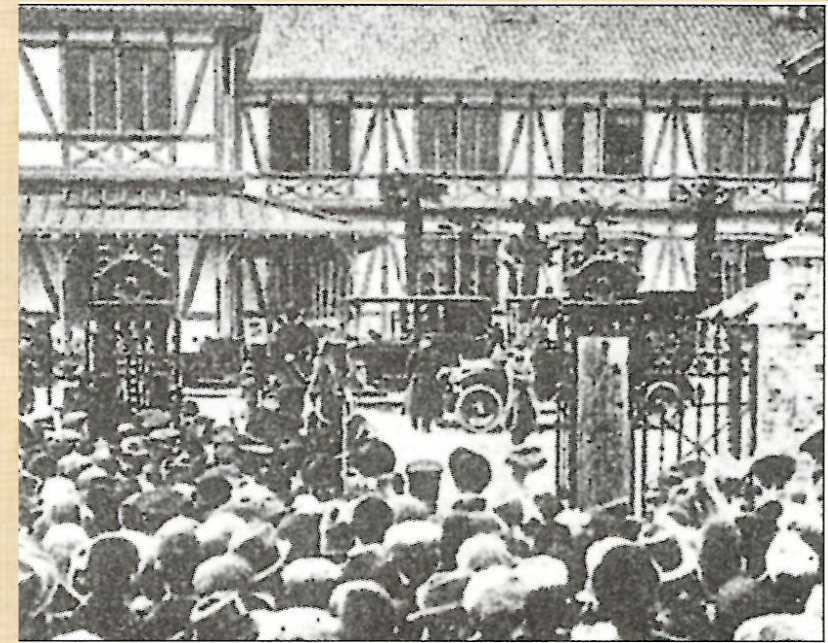
（有山輝雄）



# 第一次護憲運動と民衆

- ① 1912西園寺内閣崩壊⇒桂内閣成立(12/21)
- ② 尾崎行雄・犬養毅、記者ら国民大会開催決定  
⇒12/19憲政擁護大会＝「閥族打破、憲政擁護」  
⇒新聞での連日の報道
- ③ 護憲運動の全国化  
2/1大阪(2～3万) 2/5民衆数万人
- ④ 2/9国会での不信任案採決に呼応し数万の民衆が議院を包囲  
一部民衆の暴徒化＝日比谷事件の再来に  
⇒2/10～11警官と衝突、国民・都・やまと・二六などの各新聞社や警察署・交番が焼き打ち。軍隊が出動した。
- ⑤ 地方への波及…大阪、神戸、広島、京都など
- ⑥ 2/11、第三次桂内閣崩壊

- ・ 民衆の力が内閣を倒した日本史上まれな事件
- ・ 政友会は民衆ではなく、閥族との妥協を選ぶ。



上・下：国会周辺に集まった民衆





# 大衆騒擾の発生 (アンドルー・ゴードンの研究より)

## (1)発生への流れ

- ①政治・経済・外交問題の発生
- ②諸団体の活動…実業団体・各種政治クラブ・弁護士組織・新聞記者団体・地元政治団体など
  - 1)嘆願書・決議文、政府との懇談
  - 2)他団体との合同での演説会開催決定
  - 3)新聞での大々的な報道
- ③一般大衆の演説会・国民大会への参加
- ④騒擾へ発展するかは、警察の判断と参加者の熱意

## (2)発生する日時…9月5日か、2月11日、その周辺の日

2月11日（明治憲法記念日の面）⇒「普選デー」として定着

## (3)場所＝日比谷公園が起点

⇒政府が「戦勝祝賀会」として利用した「公」的空間

## (4)ターゲット…警察署・交番、体制と関係の深い組織・新聞社・市電（←人力車夫の競争相手・一方的な値上げ）

この時期の騒擾の背景は、国民の自由と公益を無視していた国家と国民不在の体制へ反発にあった。（ゴードン）



左…普選運動で国民の前で熱弁をふるう尾崎行雄  
下…1908年の増税  
反対国民大会のビラ  
（毎日新聞掲載）

増税反対国民大会  
於日比谷公園  
二月十一日 午後一時  
来會者心得  
△凶器一切携帯すべからず  
△石油とマッチ棍棒の用意  
すべからず  
△警官と衝突すべからず  
△交番焼打すべからず  
△電車焼打すべからず  
△国会議事堂に投石するべ  
からず  
△増税案賛成議員政友  
会員を毀打すべからず  
右注意すべし



# 大衆騒擾の構造

- ①**指導者上層部**…尾崎行雄・島田三郎など有名な名士
- ②**サブリーダー**…大衆に目標を告げる・バラの徽章など
  - 1)指導者のもとに出入りしていた人物
  - 2)政治団体の加入者など
- ③**地元運動家**…新聞の号外を読み聞かせる・他の集会のついでに参加
- ④**積極的参加者**…群衆に対し政府批判の演説をする  
組織・団体に参加しないが積極的な政治意識を持つ人物
- ⑤**消極的参加者**…「参加理由や動機は偶然のみではなかったが、曖昧模糊としている」→投石・警官をどなる  
「みんなやれやれというから何の気なしにやった」  
演説会に参加したり、新聞で大会を知って参加など  
→無料で参加できる大会に、お祭りの・レジャー的感覚で参加、「面白さ」にも政治的関心が
- ⑥**傍観者・偶発的参加者**…火事をみて駆けつけ、投石

特定の社会階級でもなく、それぞれ別の立場の人や団体、種々の職業を持つ都市中間層や下層からなる。こうした「協働」の背景には「民衆主義的国家主義」ともいえる独特の政治意識が存在していた。

表3 東京での騒擾参加者の職業と東京の労働人口構成

| 職 業              | 1905.9.5<br>+1906.9  | 1913.2.10<br>+1914.2.10 | 1918. 米騒動            | 1908年東京市<br>職業人口調査 |
|------------------|----------------------|-------------------------|----------------------|--------------------|
| 商人・小経営者<br>とその雇員 | 91(27.8%)            | 64(29.9%)               | 60(24.1%)            | 40.8%              |
| 職 人              | 82(25.0 )            | 27(12.6 )               | 22( 8.8 )            | 6.7                |
| 人 夫・日 雇          | 28( 8.6 )            | 13( 6.1 )               | 47(19.0 )            | 6.2                |
| 運輸労働者<br>(内、人力車) | 29( 8.9 )<br>(16=5 ) | 10( 4.7 )<br>(3=1.4 )   | 7( 2.8 )<br>(6=2.4 ) | 10.9<br>(2.3)      |
| 学 生              | 10( 3.1 )            | 41(19.2 )               | 10( 4.0 )            | ?                  |
| 事務員・管理職          | 13( 4.0 )            | 8( 3.7 )                | 28(11.2 )            | 11.6               |
| 無 職              | 20( 6.1 )            | 28(13.1 )               | 9( 3.6 )             | 0.8                |
| そ の 他            | 10( 3.1 )            | 7( 3.2 )                | 13( 5.2 )            | 9.5                |
| 合 計              | 327                  | 214                     | 249                  | 100<br>=712,215    |

アンドルー・ゴードン「戦前日本の大衆政治行動と意識をさぐって」(歴史学研究1987・1)

# 民衆を動かすもの～大正デモクラシーの底流

## (1) 具体的問題への関心

① **経済問題** 1) 税＝「三悪税」 2) 物価＝米その他の値段

② **対外強硬主義と帝国主義**

1) アジアにおけるヘゲモニー

2) 国民・国家・天皇の名誉と利益を獲得する

③ **政治改革**

1) 藩閥・官僚の非立憲＝**国民を無視する政治を拒否**

2) **国民の政治参加の可能性や機会を増やす**

3) 立憲政治の確立

## (2) 大衆の政治意識の底流としての「**正義感**」

① 政治における**公平と公益の尊重**→公益を無視した料金値上げ

② **行動・集会・言論の自由の尊重**

③ **国民の意思の尊重**＝流行語「国民の意思」「民意により」

④ ①～③をまとめるものとしての**立憲的政治**



アンドルー・ゴードン  
(Andrew Gordon、1952～)  
アメリカ合衆国の歴史学者。  
1995年よりハーバード大学  
歴史学部教授専門は、日本  
近現代史、労働史。

正義政治は立憲政治であり、天皇と国家の名誉を保持するとともに、民意にしたがって行われる政治であり、民意に従わないすべての機関(官僚、警察、時には政党・新聞も)は非立憲的で大衆の怒りの的となった(ゴードン)



# 日本を「国民」のものとするために 普通選挙権獲得（普選）運動

政治を「国民」のものとするために  
国民の意見をできるだけ正確に反映する選挙制度としての  
普通選挙制度要求が発生。

- ①普通選挙権…納税額などの制限がなく、全員が一票の権利を行使できる選挙制度
- ②日清戦争後、民権運動の流れを引く人びとや社会主義者の中から発生
- ③国民国家の確立＝「政治は国民の意思に従って進められるべき」との考えの広まり。
- ④第一次護憲運動(1912)やシーメンス事件(1913)  
⇒いかに国民の意見を政治・議会に反映させるかが課題に



普通選挙期成関西労働同盟  
のデモ、集会は中之島公園  
で行われた。  
中央左は尾崎行雄

# 普通選挙運動の拡大

## ① 吉野作造ら＝啓蒙運動を活発化

- ・黎明会…1918(大正7)年吉野らが創設した社会啓蒙団体、全国を遊説し普通選挙実現運動を進めた。
- ・学生ら…新人会などの学生団体を組織
- ・労働組合(友愛会)…組織的に運動に取り組む

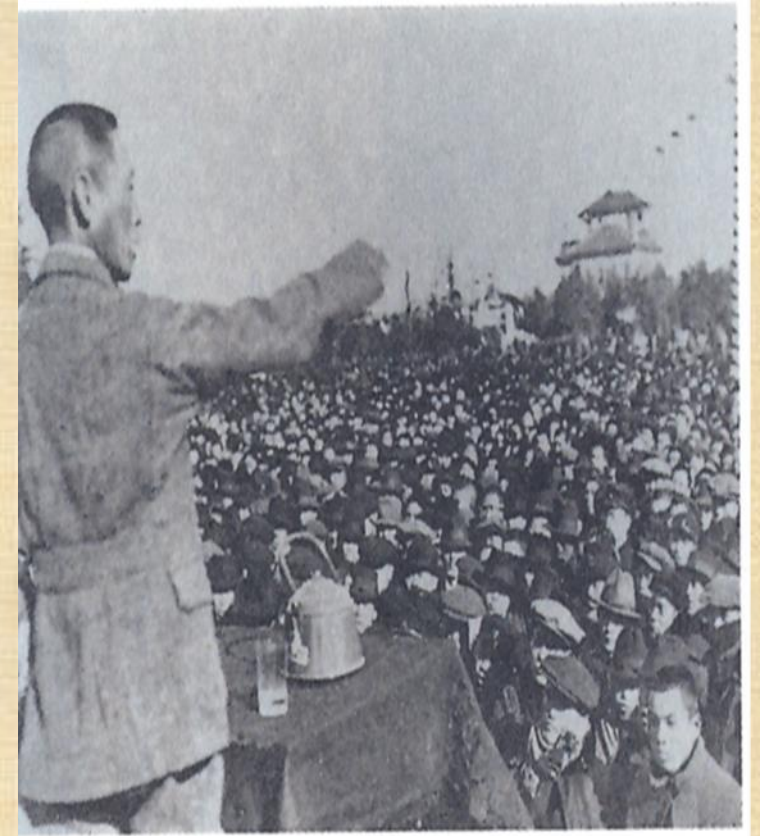
⇒地方インテリ層・学生団体・労働組合などに拡大

## ② 1919～普選運動の高揚＝広汎な層を巻き込む

第42議会開催中…演説会・デモ行進・戸別訪問  
連日1万人の大集会(東京)、34府県での開催

⇒憲政会・国民党、国会に普選法案を提出

原内閣の衆議院解散＝総選挙戦術によって挫折



普通選挙期成演説会で芝公園に集まった数万人の群衆の前で、熱弁をふるう尾崎行雄 1920年2月



# IV、友愛会の成立と労働者 ～尊厳を自覚した労働者たち～





# 友愛会の結成と鈴木文治

## ①友愛会(1912結成)

労働組合の体裁すらもたない、共済・修養団体として結成。

②キリスト教社会改良主義の立場の社会運動家鈴木文治が結成  
社会政策学会（桑田熊蔵・関一ら）・キリスト教弘道会（安部磯雄）  
などの援助をうける。

③鈴木…キリスト教・窮乏体験・社会政策研究を通じての社会の  
不合理性への自覚を深める。

④鈴木の見方…「労働者の虐げられた境遇に深く同情し…日本の  
労働者の地位を改善するには穏健な労働組合」が必要で、「その  
ことにより階級闘争の激化を防ぐことができる」（松尾尊兌66）



⑤1912年3月 教会内に労働者倶楽部を開設  
→集まった労働者との歓談＝友愛会結成の気運高まる

⑥8月1日（明治天皇死亡の翌々日）友愛会を結成  
20数名参加（⇒会員15名） 畳職・電機工・牛乳配達人など



鈴木文治(1885～1946)  
宮城県生れ。吉野作造と同郷。幼少時にキリスト教に入信、苦学ののち東京帝大卒業。朝日新聞社を経てユニテリアン派の伝道団体で社会事業に着手、45年に同志15名で友愛会を結成。左派の台頭に対して労働組合主義を堅持、1930年まで終始友愛会・日本労働総同盟の会長職にとどまった。



# 初期の友愛会＝共済・修養事業

## ①友愛会の事業

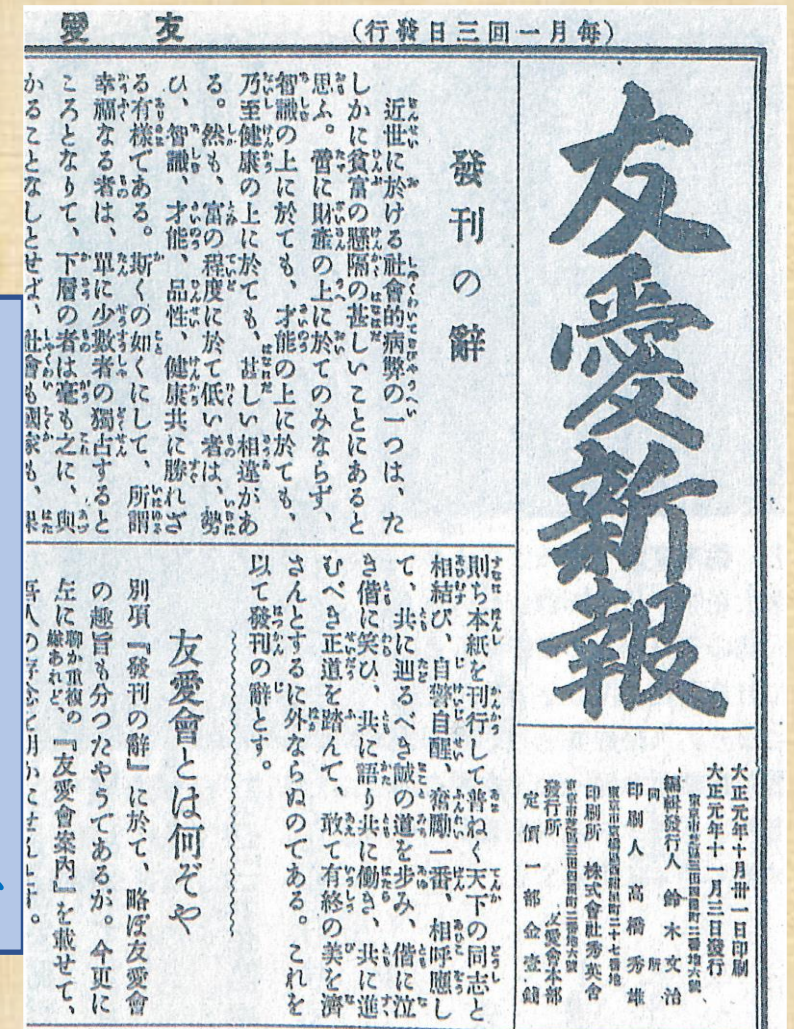
- 1) 共済事業…特約医療機関の設定、法律相談部・貯蓄部
- 2) 修養事業…例会での名士の講演、機関紙の発行

## ②友愛会での鈴木主張

- 1) 労働は神聖である。労働者は自己の職業に誇りを持つべきである
- 2) 労働者は自らの力で地位の向上を図らねばならない。そのためには団結の力によるほかはない
- 3) 地位の改善を要求する前に実力を養わねばならない。そのためには各個人の識見・技能。品性を高めること
- 4) 資本家と労働者は水魚のような関係。相争うべきでない  
多くの争議は資本家が職工の人格を尊重しないことが原因、これを改めることが資本家の自衛の道である。(松尾66)

## ③会の運営…鈴木独裁＋顧問評議員＝資本家・学者

当初は、渋沢栄一ら資本家・名士らの資金協力で運営



3 『友愛新報』 友愛会の機関紙として、職工組合の結成方法や工場法の解説などを連載し、労働者の意識を高めた。写真は、1912年（大正元）11月3日の創刊号。



# 友愛会の労働者に与えた意味

「都市雑業層」「職工」から誇り高い「労働者階級」へ

労働者が最も惹きつけられたのは“**地位向上**”への呼びかけであつた。当時、多くの青年が村を離れ、都会へ出たが、その際の目標は“成功”であつた。(中略)

新しい職業分野であり、致富の機会にも乏しく、災害の危険も高い**工場労働者、鉱山労働者になることは“立身出世”競争での落伍を意味した。**

労働者の挫折感“飲む・打つ・買う”といった道徳的退廃の瀰漫となり、“一般社会”から“職工社会”に対する差別を増幅させていった。

だから“**労働神聖論**”に裏付けられ、欧米の先進社会の実例にもとづく“**地位向上**”の呼びかけがかれらの労働運動参加への重要な契機となり得たのである。(二村一夫「労働者階級の状態と労働運動」)



# 友愛会の発展

## ～労働者の人格と社会の構成員であることの承認を要求

①「貧富の大きな格差の中で、富の程度だけでなく、知能・才能・品性・健康などすべてにわたり劣るとみなされ、世の中から頭ごなしに『職工風情』と罵られる軽蔑を取り除くこと、そのために団結して切磋琢磨し…工場主・資本家と同じ人間としてみとめられること、それがかれらの目標だった」「一個の人間として人格の承認を求め、対等の社会の構成員であることを主張しなければならなかった」(武田晴人)

②実際の活動…労働争議の調停という形式で、合法的な支援を行う  
＝成功体験は団結権・争議権のない労働者・争議団から感謝された

③会員の増加…15人(結成時)→1326人(13/7)→2000人・地方支部3(14/11)→6500人・地方支部13(15/6)

支部＝地方名士や会社幹部が長、役付きの熟練工が中心＝平沢計七・松岡駒吉ら

④支援者…1)資本家・官僚、2)民主主義的知識人・学生⇒二つの方向性

# 修養・共済団体から労働組合へ

## ①民主主義的思潮の伸張

→資本の専制にたいし労働者の権利を尊重せよとの声

## ②労働者の自覚＝労資対等を原則とした労資協調を主張

→ストライキ・労働団体の急増、友愛会組織の拡大

「不正義なる資本家と大争闘を試みなければならぬ」

## ③1916 鈴木、海外視察から帰国＝労働組合主義へ

「階級的自覚による『生存権』確保のための団結」

→団結権・ストライキ権の承認と他方での労資協調

## ④修養のための団結から労働条件維持改善のための団結へ

→1917組織改革＝女性労働者加入・婦人部設置・本部機能充実

## ⑤会長の「調停」による解決、争議指導は行わない

→労働者による自力解放を主張する動きの活発化



上..室蘭支部の友愛会旗  
左..友愛会記章(結成5年  
記念)



# 大戦景気のなかでの日本の変化

女工・職工⇒男子・熟練労働者へ

① 鉱工業労働者の急増＝約100万人⇒約150万人へ  
⇒ 労働力需要の高まり＝労働者の地位の高まり

② 男子・成人、大工場・熟練労働者の増加  
家計補充・副業から生活の中心・本業に  
⇒ 先進国型の労働スタイルへの急激な移行  
⇒ 前近代的労働環境との摩擦激化

③ 労働問題・都市問題の深刻化

食料や生活必需品、とくに米不足⇒物価急騰  
物価上昇に追いつかぬ賃金上昇  
住宅不足・道路・水道・ゴミ・環境悪化

東京府の人口の推移

単位：人

| 年         | 15区      | 郊外       |
|-----------|----------|----------|
| 1914(大3)  | 210万0307 | 110万2362 |
| 1917(大6)  | 234万9830 | 127万7833 |
| 1920(大9)  | 217万3201 | 145万4166 |
| 1923(大12) | 226万5300 | 170万6700 |
| 1926(昭1)  | 206万8900 | 249万9200 |
| 1929(昭4)  | 229万4600 | 277万1700 |

(『東京府統計書』など)

# 労働者の不満の蓄積

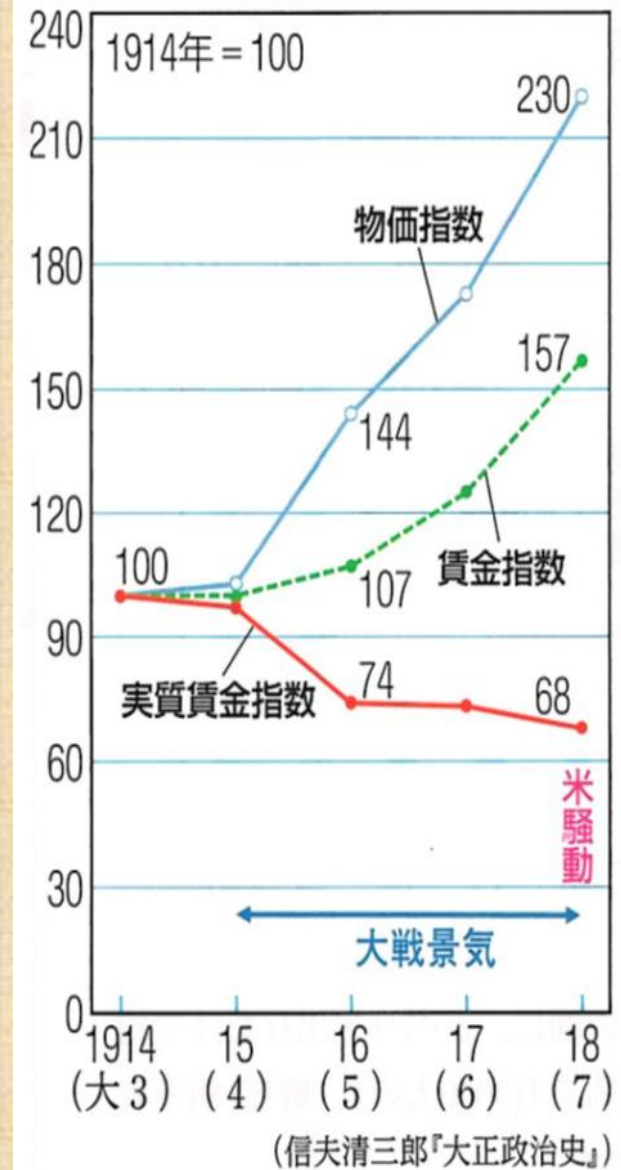
## 1917年、内務省警保局の報告書から

物価、ことに生活必需品が価格暴騰をおこしているにもかかわらず、賃金の増加はこれに伴わないため、一般労働者は戦前と比べて生活上の困難が増していることはおおうことが出来ない。中流以下の国民が**生計困難**となっている状態は、本年になって、とくに顕著である。

にもかかわらず資本主、ことに多数の職工・坑夫を用いる大規模の鉱山・工場は、戦争による利潤がきわめて大きく、**巨富を得た資本家**が増加していることも大正6年を異例としている。

したがって、労働者が資本主に対して**反感**をいだき、これを**嫉視**する状態にあることも否定できない事実である。

(内務省警保局『大正6年労働争議概況』より現代語訳)



大戦における物価上昇



# 此生活難を如何

## ～米騒動下の工場労働者の訴え～

此生活難を如何

▲私の一家は妻と六歳に四歳の男児の四人生活で私は九年前からある工場に勤続して三〇円内外の月収で乾燥した生活が続けてきた。今年になってその無味を通り越して生活が出来なくなった。心が宙に迷って**転職しよう**と思っていると会社ではようやく（あるいは大英断で）**二割の増給**をしてくれた。しかし**物価の暴騰**で収支は依然**一致しない**。試みに今月の実行予算を示せば下記の通りであるが、**支出が収入より五円九三銭五厘の超過**である。

▲朝の六時より夕の六時まで働いてなお結果はこれである。楽しかるべき家庭の人となる間、なお食の不足を訴えられる。それ食に飽かざるは人生の常か？生の意義あらしむる努力に要する燃料は充分ならざるべからず。わが働き二六時間は短きか、己が努力が不足なのか、敗者はまさに自滅せんとす。（8月23日）



米騒動直前の細民調査(東京パック)

| 生活問題 (投票を密に)                                                                                                                                                                                              |  |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| 此生活難を如何                                                                                                                                                                                                   |  |
| ▲私の一家は妻と六歳に四歳の男児の四人生活で私は九年前からある工場に勤続して三〇円内外の月収で乾燥した生活が続けてきた。今年になってその無味を通り越して生活が出来なくなった。心が宙に迷って転職しようと思っていると会社ではようやく（あるいは大英断で）二割の増給をしてくれた。しかし物価の暴騰で収支は依然一致しない。試みに今月の実行予算を示せば下記の通りであるが、支出が収入より五円九三銭五厘の超過である。 |  |
| ▲朝の六時より夕の六時まで働いてなお結果はこれである。楽しかるべき家庭の人となる間、なお食の不足を訴えられる。それ食に飽かざるは人生の常か？生の意義あらしむる努力に要する燃料は充分ならざるべからず。わが働き二六時間は短きか、己が努力が不足なのか、敗者はまさに自滅せんとす。                                                                  |  |
| 計 四十二                                                                                                                                                                                                     |  |
| 炭一俵半                                                                                                                                                                                                      |  |
| 味噌三升                                                                                                                                                                                                      |  |
| 漬物(二人一食二)                                                                                                                                                                                                 |  |
| 湯(五日に一圓)                                                                                                                                                                                                  |  |
| 煙草(五圓一)                                                                                                                                                                                                   |  |
| 新聞一種                                                                                                                                                                                                      |  |
| 子供小遣(一人一日)                                                                                                                                                                                                |  |
| 衣服指卸費                                                                                                                                                                                                     |  |
| 雑費                                                                                                                                                                                                        |  |
| 外米の炊                                                                                                                                                                                                      |  |
| ▲外米の炊は去り美                                                                                                                                                                                                 |  |
| 記の方法が一掃より                                                                                                                                                                                                 |  |
| 五分間休演けてよく洗                                                                                                                                                                                                |  |
| に酢一合の割合に混合し                                                                                                                                                                                               |  |
| て一夜置きよく洗                                                                                                                                                                                                  |  |
| は短きか己が努力が不足なのか、敗者は                                                                                                                                                                                        |  |
| まさに自滅せんとす                                                                                                                                                                                                 |  |

# 家計簿をのぞいてみる

①5円94銭(計算では8円24銭)の赤字

②収入に占める米代が39%

食費合計では64%を占める。

## 職人の賃金相場(日給)

大工：一円四〇銭(賄付)、左官一円五〇銭

瓦葺一円四〇銭、指物師一円三〇銭

石工一円六〇銭、植木職一円

⇒月給換算で三〇～三五円程度

6～9月で約2割値上げに

## 工場労働者の米消費量(東京・月島)

夫婦と5人の子ども=2升～2升2合/日

6人家族=1升5合/日、夫婦2人=1升/日

ある工場労働者の家計(東京日日新聞1918年8月23日)

|         |        |       |                |
|---------|--------|-------|----------------|
| 収入      | 36.00  |       |                |
| 米代      | 14.00  | 38.9  | 1日一人3合弱、3斗5升   |
| 副食品     | 7.00   | 19.4  | 一人1食2銭         |
| 味噌      | 0.70   | 1.9   | 1貫目            |
| 醤油      | 1.20   | 3.3   | 3升             |
| 家賃      | 7.50   | 20.8  | 3畳と6畳の2間       |
| 薪代      | 0.75   | 2.1   |                |
| 炭代      | 1.875  | 5.2   | 1俵半            |
| 湯銭      | 0.72   | 2.0   | 5日に一回          |
| 電燈      | 0.45   | 1.3   | 5燭1            |
| 理髪代     | 0.60   | 1.7   | 妻は手巻き          |
| 衣服償却費   | 3.00   | 8.3   |                |
| 履物償却費   | 1.00   | 2.8   |                |
| 煙草      | 1.14   | 3.2   |                |
| 新聞      | 0.50   | 1.4   | 1種             |
| 子どもこづかい | 1.80   | 5.0   | 1人1日3銭         |
| 雑費      | 2.00   | 5.6   |                |
| 支出計     | 41.935 | 116.5 | (計算では、44.235円) |
| 赤字      | 5.935  | 16.5  | (計算では、8.235円)  |



# 米騒動前後の米価変動

①米価の上昇は18年の6月までは2度の急騰をはさみながら月1円前後の上昇をくり返してきた。

⇒先の投書では2割の賃上げがあった。(30円⇒36円)

②しかし18年の8月に入ると一挙に8円強というこれまでにない急騰がやってくる。

③投書の家族(36円で換算)についてみれば収入の2割程度であった米価が一挙に4割に近づいたことがわかる。

④米騒動によっても米価は下がらず、10月再び急騰する。

| 月平均一石あたりの正米価格 |     |       |          |      |                             |       |          |      |
|---------------|-----|-------|----------|------|-----------------------------|-------|----------|------|
|               |     | 正米価格  | 前月からの上昇幅 | ※    |                             | 正米価格  | 前月からの上昇幅 | ※    |
| 1917          | 4月  | 16.28 |          | 15.8 | 4月                          | 27.38 | 0.85     | 26.6 |
|               | 5月  | 17.27 | 0.99     | 16.8 | 5月                          | 27.67 | 0.29     | 26.9 |
|               | 6月  | 20.30 | 3.03     | 19.7 | 6月                          | 28.68 | 1.01     | 27.9 |
|               | 7月  | 21.93 | 1.63     | 21.3 | 7月                          | 30.58 | 1.90     | 29.7 |
|               | 8月  | 21.14 | -0.79    | 20.6 | 8月                          | 38.70 | 8.12     | 37.6 |
|               | 9月  | 21.45 | 0.31     | 20.9 | 9月                          | 38.00 | -0.70    | 36.9 |
|               | 10月 | 23.82 | 2.37     | 23.2 | 10月                         | 44.41 | 6.41     | 43.2 |
|               | 11月 | 23.93 | 0.11     | 23.3 | 11月                         | 40.03 | -4.38    | 38.9 |
|               | 12月 | 23.90 | -0.03    | 23.2 | 12月                         | 40.59 | 0.56     | 39.5 |
| 1918          | 1月  | 24.03 | 0.13     | 23.4 | 単位：円                        |       |          |      |
|               | 2月  | 25.13 | 1.10     | 24.4 | ※は、収入36円の前出の家族における家計での割合(%) |       |          |      |
|               | 3月  | 26.53 | 1.40     | 25.8 |                             |       |          |      |

# 労働争議の広がり

## 米価暴騰⇒賃上げ要求のストライキで対応

### ①1918、8月博文堂印刷所のストライキ

米価上昇に伴う賄い料の値上げ通告（3食23銭⇒27銭）

労働者が職工総会で賃上げ要求を決議

⇒重役会、弁当値上げ分4銭分の日給引き上げ

欧文課「日給30銭引き上げ」要求し、ストライキ決行

⇒戸別訪問で出勤を求め7～12銭の引き上げ実施

欧文課、四名をのぞき退社⇒熟練労働者は好条件に移動

### ②周辺の会社にも波及

・日清印刷＝2割増給を要求⇒1割の賃上げを実現

・汽車製造会社＝80名が突如スト決行

（←「皆勤者の2割増給、他は増給巾を減らす」提案）

・石川島造船所＝賃金引き上げを要求してストに突入

・月島の木造船の船大工＝賃上げ要求のストライキに

### ③公務労働者の賃上げ要求も

…塵芥掃除人夫のストライキ、水道課、駒込病院、宮内省省丁

大阪九条署巡查＝連名で賃上げを嘆願

## ストライキ統計

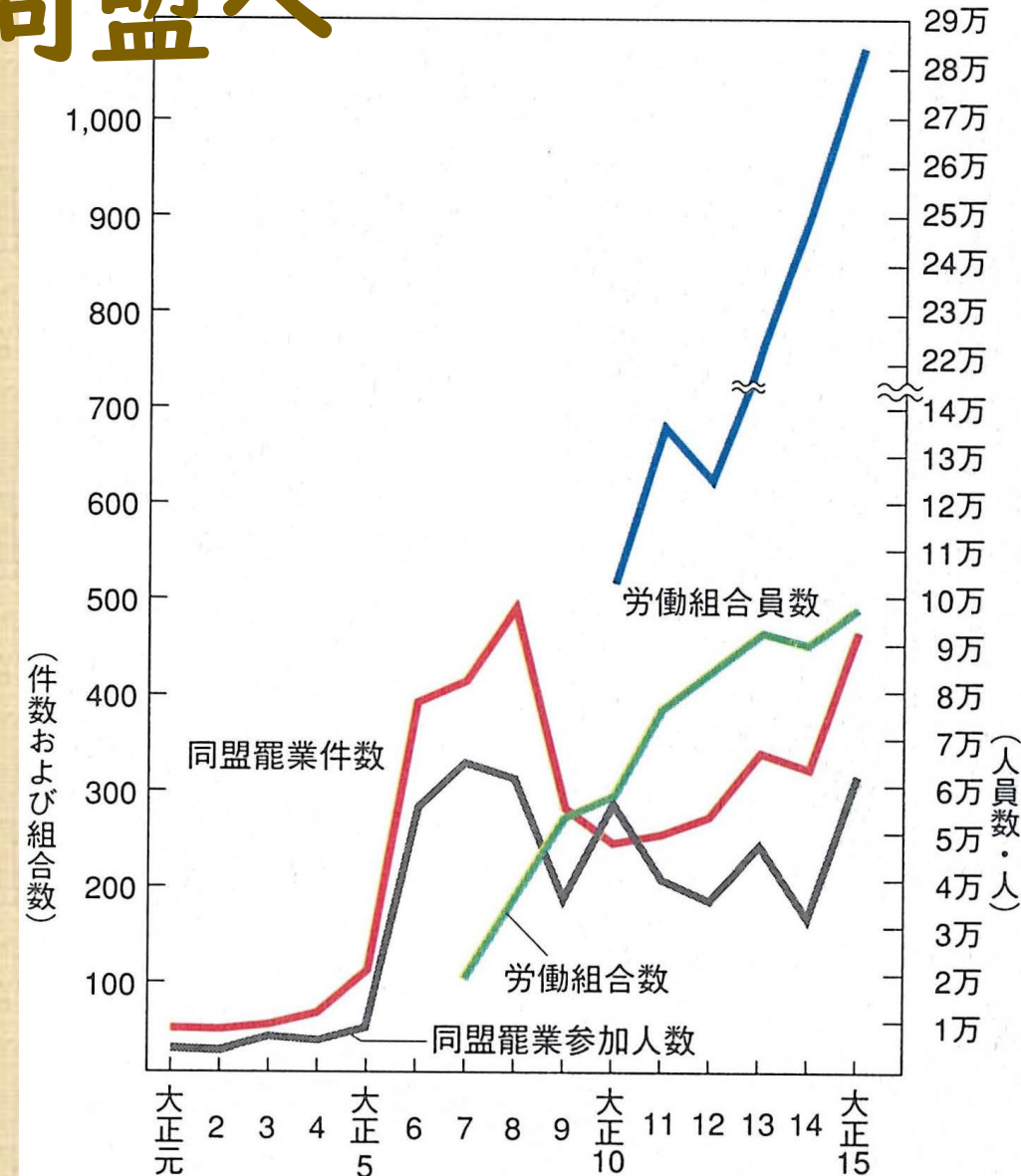
|      |     | 件数  | 参加人数   |
|------|-----|-----|--------|
| 1910 | M43 | 10  | 2,934  |
| 1911 | M44 | 22  | 2,100  |
| 1912 | T1  | 49  | 5,736  |
| 1913 | T2  | 47  | 5,242  |
| 1914 | T3  | 50  | 7,904  |
| 1915 | T4  | 64  | 7,852  |
| 1916 | T5  | 108 | 8,413  |
| 1917 | T6  | 398 | 57,309 |
| 1918 | T7  | 417 | 66,457 |
| 1919 | T8  | 497 | 63,137 |
| 1920 | T9  | 282 | 36,371 |
| 1921 | T10 | 246 | 58,225 |
| 1922 | T11 | 250 | 41,503 |

第一次大戦



# 友愛会から日本労働総同盟へ

- ①大戦下…各地で**労働争議の急増**  
→好景気を背景に賃上げなどを実現
- ②**米騒動…労働組合結成・組合加入者急増**
- ③ILOの設置…**労働者保護の世界的潮流**  
友愛会…団結権承認・労働組合公認・8時間  
労働制・団体交渉権などの権利要求を提出  
⇒治安警察法17条(労働組合結成を規制)撤廃  
・普通選挙法制定など**政治的要求も提出**
- ④**1919 大日本労働総同盟友愛会と改称**  
労働組合の協議会との性格を強める  
**1920 第一回メーデーの実施**
- ⑤**1921 日本労働総同盟と改称**  
要求実現のため資本家とたたかう方針に



労働争議と労働組合組織状況



# V、米騒動の発生 ～たちあがった民衆～



「大コメ騒動」(本木克英監督)2021年1月8日公開



米騒動絵巻（名古屋での米騒動を描く）



# 富山の女房一揆

①都市化による米需要=米価上昇  
米価騰貴・シベリア出兵⇒買占・売惜み  
米の端境期⇒米の移出の活発化

②1918(大正7)年7月～

富山県漁村女性による米騒動活発化  
=米移出反対の暴動発生・廉売要求

③新聞記事(「富山の女房一揆」)  
による拡散  
(地方紙⇒全国紙)

◆一揆米屋を襲ふ  
魚津町に愈生活難の殺氣  
昨朝の如く、下新川郡魚津町大字上、下新川郡の貧民は生活難の一揆を惹起さんして廿日未明、海岸に集合せしを警察署に逸早く探知し解散せしめ總代を召喚して説諭する所ありしが、如何にせん又廿三日夜一同、魚津町内各米穀商店に殺到し此際米を他へ輸出し

1918年7月25日北陸タイムズ

●女房連の一揆  
米高に堪へず、米を喰ひ立て、二百餘名、米屋へ押ししかく、せざる様を嘆し、若し撤出せば、打すべし等と過激なる語を放ち、十時、再び魚津町に掛け、警察署を襲撃し、警察署は警員を派して解散を命じ、第一の警戒に備へたるため、先解散したるものには、四日朝まで、米屋の前に立番し居たるものあり、

●女房一揆擴大す  
更に六七百名の新集團起り、瓦石を投げ、戸障子を破壊す、を投げ、戸障子を破壊する、大規模な騒動となり、警察署に襲撃され、警察署は警員を派して解散を命じ、第一の警戒に備へたるため、先解散したるものには、四日朝まで、米屋の前に立番し居たるものあり、

●女房一揆擴大す  
更に六七百名の新集團起り、瓦石を投げ、戸障子を破壊す、を投げ、戸障子を破壊する、大規模な騒動となり、警察署に襲撃され、警察署は警員を派して解散を命じ、第一の警戒に備へたるため、先解散したるものには、四日朝まで、米屋の前に立番し居たるものあり、

1918年8月6日大阪朝日新聞



# 米騒動の全国化

7月以降 富山の漁民らの暴動の広がり

8月以降 富山の漁民らの暴動激化

8月4日 地方紙の本格報道はじまる

8月5日 大阪朝日・大阪毎日が富山の暴動を報道



8月10日 大阪朝日・岡山の暴動を報道

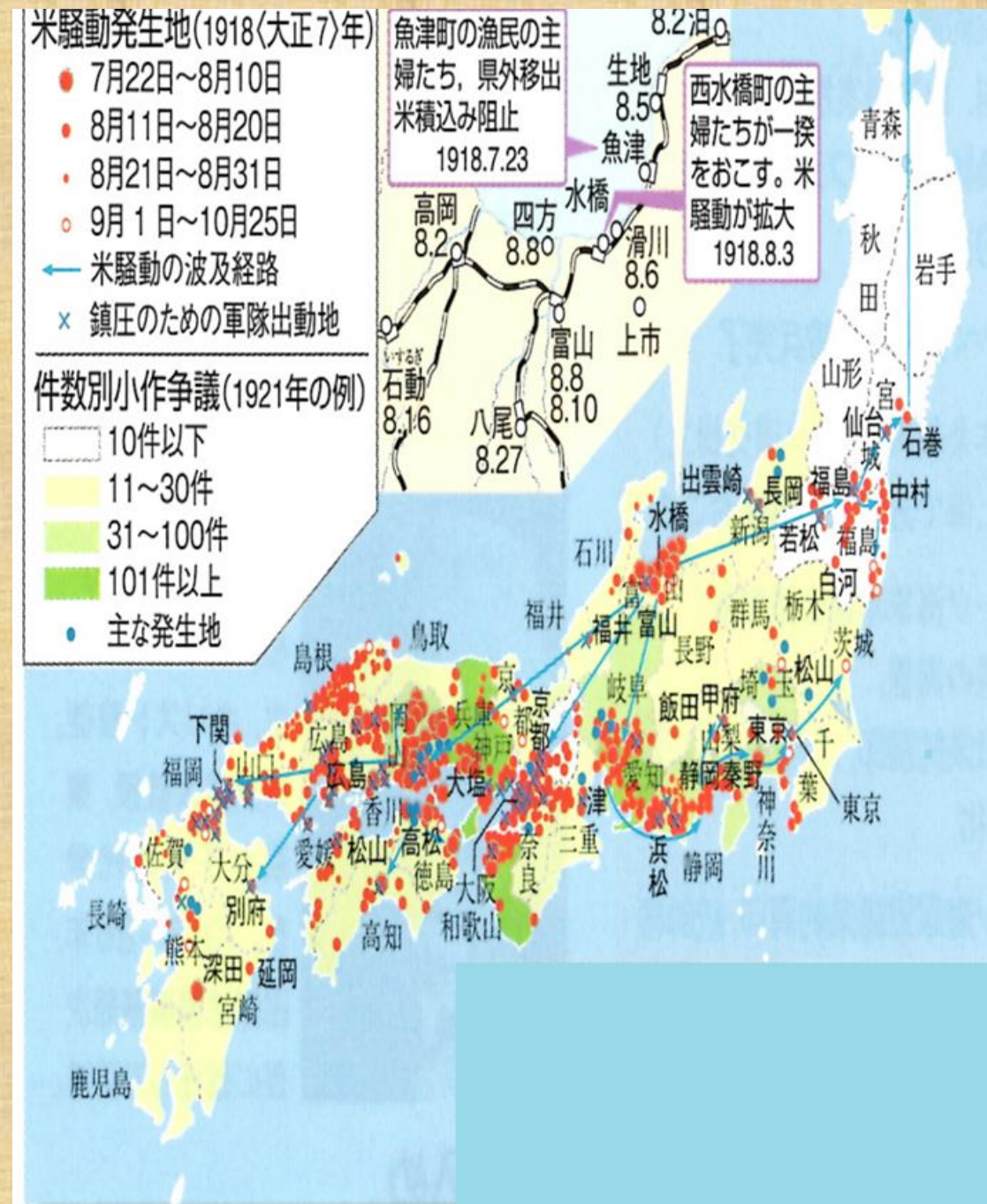
8月11日 大阪朝日・10日の京都での暴動を報道

8月12日 大阪での暴動が本格化

→連日、報道

米騒動の全国化 神戸・名古屋・東京などへ

→8月下旬 工場や炭鉱での暴動に





# 米騒動絵巻～名古屋での米騒動



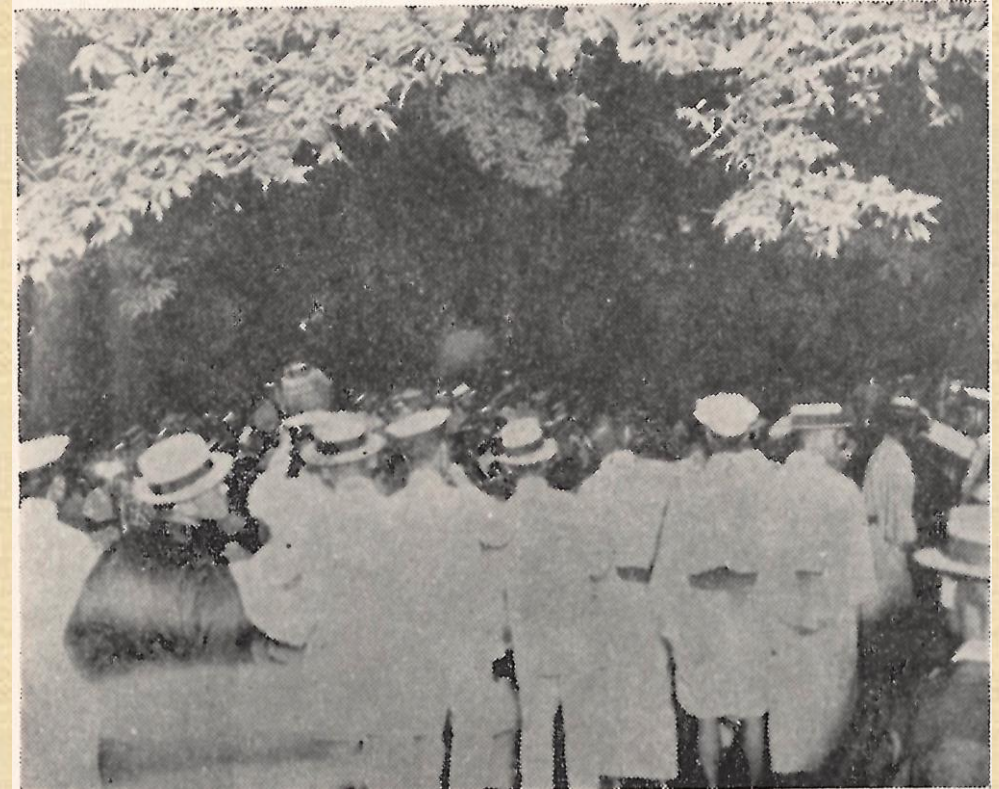


# 東京での米騒動～日比谷での市民大会

- ①宮武外骨、東京朝日新聞に日比谷公園での市民大会開催の広告掲載
- ②警察「治安警察法」を根拠に集会不許可、主催者らを監視
- ③当日、会場に群衆が集合、約2000人  
「世間が難儀しているのに、利益を得て不名誉と感じない者がいる、制裁を加える必要がある」  
「当局に向かって米価調整を願うため押し寄せよう」
- ④公園から追い出された群衆、銀座・日本橋方面へ、警官と小競り合いをくり返しながら投石、交番を襲い、市電を止め、取引所・深川米倉庫付近へ⇒阻止される。
- ⑤14日、日比谷だけでなく浅草・神田・下谷などでも暴動が発生＝労働者も街頭に繰り出す。軍隊も出動
- ⑥15日、軍隊の増員。民衆は各地で分散した行動に。

次第に沈静化

⇒**かわって、工場での労働争議の活発化**



日比谷公園に集まった群衆(8月13日)



# 米騒動の中で



## 警戒にあたる自警団(8月14日大阪)

## 夜間外出禁止令を見る人びと

|                                                                                                            |                                  |                                    |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|------------------------------------|
| <p>米を賣ら目</p>                                                                                               | <p>一月十一日<br/>一月十八日<br/>一月廿五日</p> | <p>(各) 午後二時より<br/>(土曜) 午後四時迄の間</p> |
| <p>米を賣る所</p>                                                                                               | <p>瀬上町役場</p>                     |                                    |
| <p>外國米 廉價購買券</p> <p>貳升券 (代金拾錢)</p> <p>注意<br/>此券は他人に賣渡譲渡を許さず、<br/>此券は月廿五日以後及在米賣場にてのみ<br/>此券は失効するも再び下渡す可</p> |                                  |                                    |



# 鉦山・炭坑における米騒動

## ～労働運動との結合～

### ①宇部炭坑

労働者「採炭賃三割増、支払期日厳守、構内の仕入れ店の物価引き下げ」要求

⇒米の廉売券を出しただけで、回答延期

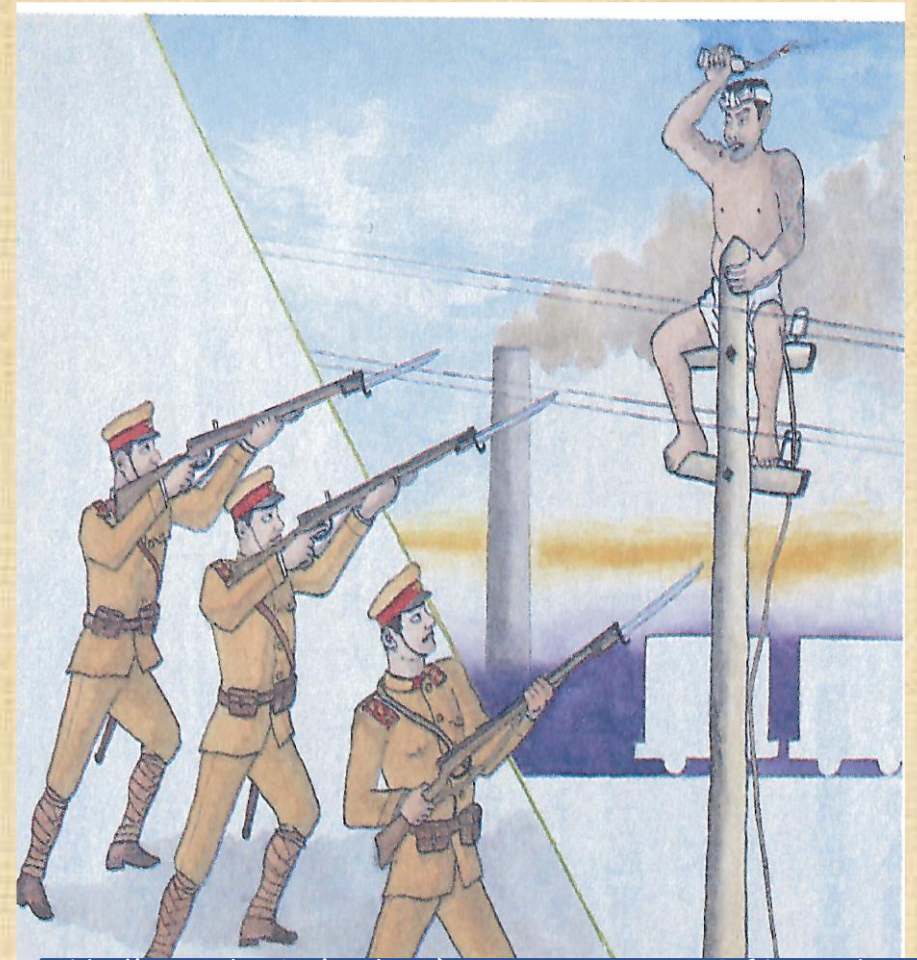
⇒事務所・仕入れ店、炭坑主邸宅、遊郭を襲撃＝村内の民衆も参加

⇒村長・軍隊の出動要請⇒実弾で鎮圧

(死者12重傷11、検挙1626)

### ②筑豊・峰地炭坑

ダイナマイトで軍隊と対決



筑豊・峰地炭坑では8月17日騒動が始まり、翌18日小倉連隊の歩兵57人が出動して鎮圧にあたった。ダイナマイトで抵抗する坑夫に対し実弾が発射され、死傷者が出た。

(山本作兵衛「筑豊炭坑絵巻」)



# 米騒動の全容

- ① 1918年7月22日 富山県魚津町の漁村の主婦の蜂起  
～9月17日 福岡県明治炭坑の騒動
- ② 一道三府三八県、500カ所で騒動や不穏な事態発生  
発生しなかったのは東北の3県と栃木・沖縄の5県のみ  
直接参加者 70万人(数百万人?)
- ③ 全国化のきっかけ…新聞報道と新聞読者の拡大  
自らの行動を正当化する役割を果たす  
→政府による規制・弾圧
- ④ 騒動の形態
  - 1) 居住地を中心とする騒動  
→部落住民が大きな役割をはたす＝水平社運動へ
  - 2) 米騒動に触発された小作争議・労働争議  
→労働争議・小作争議の本格化の引き金に

## 東京における被起訴者職業別数

| 職業     | 人数  |
|--------|-----|
| 職工・工夫  | 134 |
| 人夫     | 17  |
| 商人     | 15  |
| 無職     | 11  |
| 給仕・配達人 | 8   |
| 車夫・車力  | 8   |
| 社員・店員  | 10  |
| 学生・書生  | 12  |
| 飲食店    | 4   |
| 事務員    | 7   |
| 記者     | 2   |
| 教員     | 1   |
| 雇人     | 41  |
| 按摩     | 1   |
| 計      | 272 |

# 全国水平社の創設

～人の世に熱あれ。人間に光りあれ。～





# 部落問題の「発生」

- ① 1871 (明治4)年「解放令」…封建的身分の「えた」「ひにん」など廃止
- ② 営業の自由の承認=身分的「特権」(死牛馬処理、下級刑吏など)も消滅
  - ⇒ 生活維持のための経済的保障を失う
  - ⇒ 江戸時代以来の雑業や狭小な土地での悪条件の小作などに従事
  - ⇒ 大都市などへの出稼ぎ・転居・寄留(大都市部落の形成)
- ③ 社会的隔離を背景とした封建的な差別・偏見の維持・継続
- ④ 部落=「半失業状態の人が集まっている地域という性格を強化」
  - ⇒ 半失業状態からくる貧困が差別と偏見を再生産。  
封建的な差別と近代における貧困の結合(「部落問題」の発生)
- ⑤ 近代化の進行…地域内・外の接触の機会拡大
  - ⇒ 「部落学校」から「統合学校」へ=「いじめ」と「排除」
  - ⇒ 露骨な差別事件の多発

# 米騒動と未解放部落

## (1) 京都の米騒動…部落住民が先頭

- 大阪、神戸、岡山、広島、三重、和歌山でも
- 22府県での参加が確認される

## (2) 部落における騒動の特徴

### ① 行動が組織的で、活動範囲が広がった

- 身分的連帯感・部落間の日常的な交流

### ② 生活の貧しさと日常生活における差別

に対する反発→激烈に

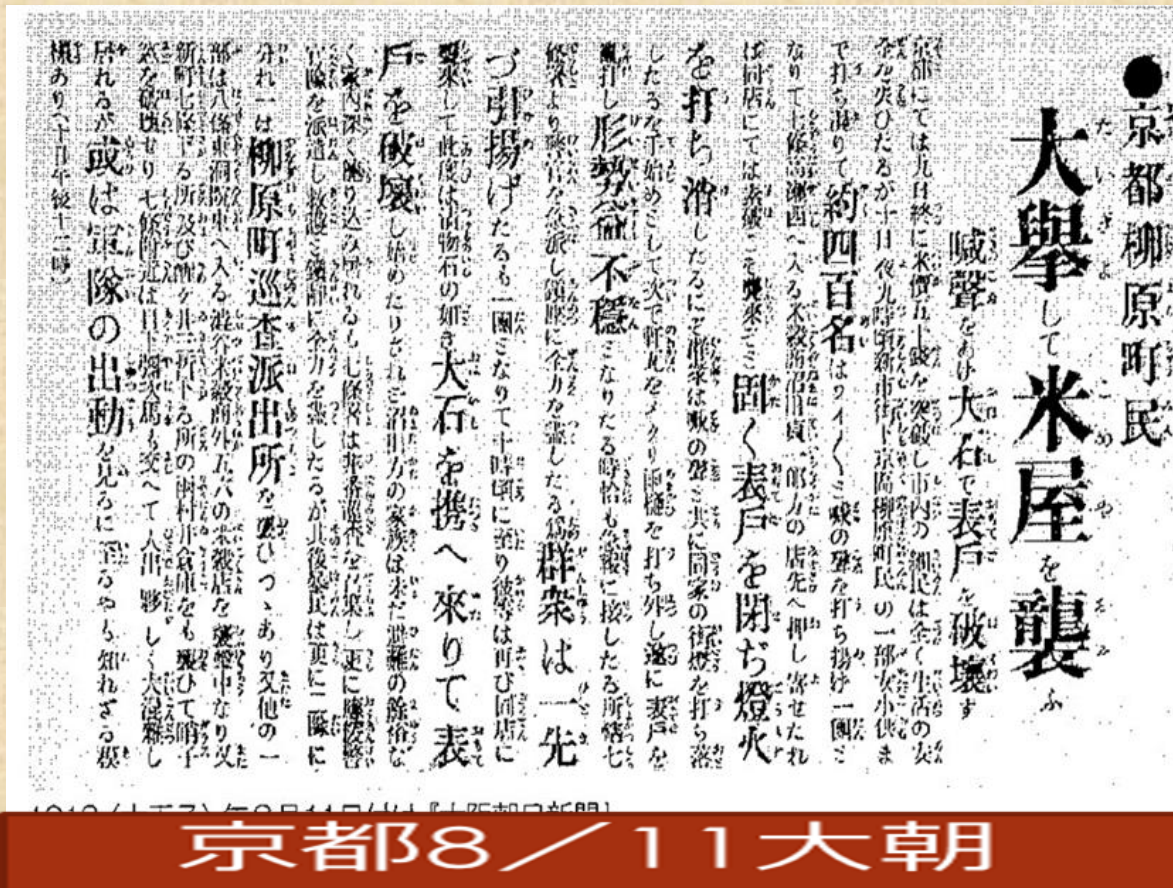
### ③ 女性・子どもを含めた地域ぐるみのたたかいに

- 逮捕された女性35人中の34名が部落女性

### ④ 部落住民と都市下層民や労働者・農民との共同行動が自然発生的に成立

## (3) 部落に対する弾圧…集中的な検挙・送検＝全体の1割を占める

同情宥和政策の強化…部落の詳細な調査、部落改善費の計上





# ある未解放部落住民の投書

～平等な人格的存在権・平等な生存権を！～

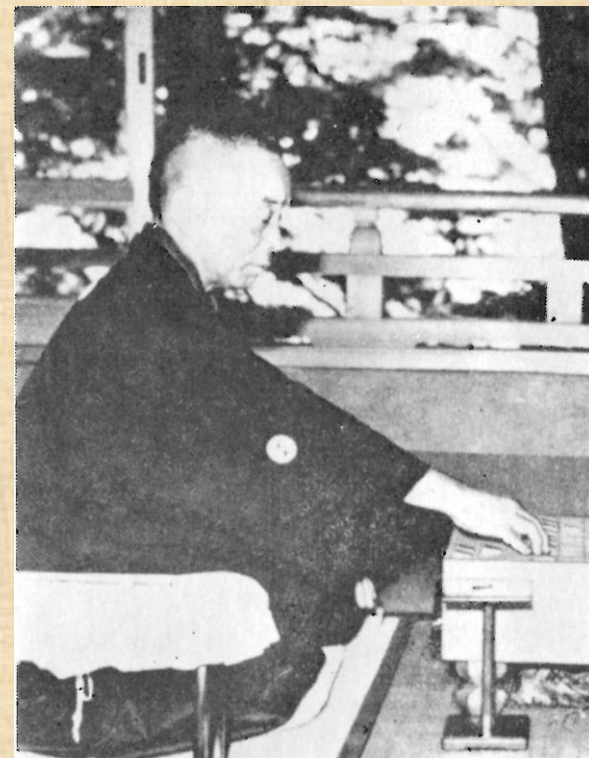
掠極  
た。火き  
し放届  
動・不  
暴盗だ  
て強甚  
っかも  
なの  
とも身  
鋒る自  
先あら  
急の俺  
に間は  
動仲とい  
騒のこて  
米らたっ  
度俺で思  
今でにに  
が動為憾  
間暴行遺  
仲の的と  
の度蛮た  
ら今のっ  
俺)があ  
(前略)中  
(略)略な  
(奪な事

抑きさそ  
であにを  
法間い策  
方年扱善  
な百馬改  
ん何牛な  
どは、う  
にらてよ  
か俺めす  
ほ…らま  
の。きだか。  
為かあをう  
行のももよ  
的るでどれ  
蛮来ま子ら  
た出つ。い  
しがいかて  
うとううし  
ここそよ受  
はるしれ甘  
られからく  
俺免しいた  
しら。てが  
かかたしり  
し害き足あ  
、迫て満う  
がやめてそ  
だ圧られう

俺らは要するに平等な人格的存在権、平等な生存権を社会に向かっ  
て要求するのだ。俺らは今日まで奪われてきたものを奪い返さな  
い。俺らは暴動がいけないの。他の正当な方法を聞

正当な方法による要求を入れてくれ。

(紀伊毎日新聞1918, 9, 4)



坂田三吉

実力第一であるにもかかわらず  
名人位に就けなかったのは被差  
別部落出身であったからと言わ  
れる

# 部落差別解消をめざす運動の発生

## ①さらなる投書(9月17日)

俺たちの求むるところは牛馬でも犬猫でもない。

「人間」だ、平等な「人格」だ。

不合理な因習の桎梏や、旧陋な階級的觀念の束縛から解放されて自由になることだ。

万人と同等な空気を呼吸し、同等な光明を仰ぐことだ。

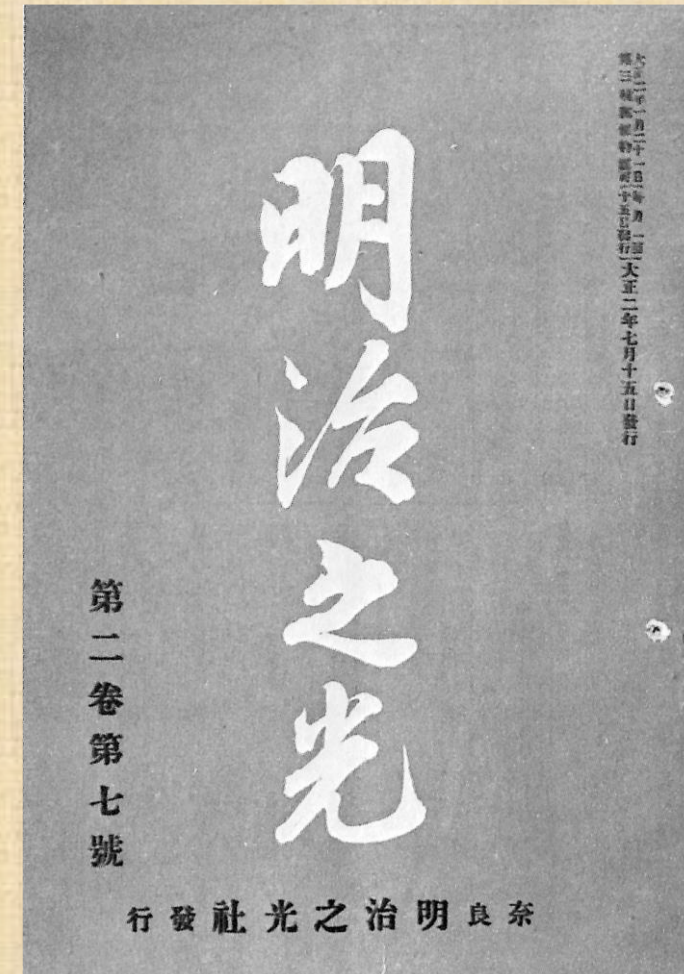
(紀伊毎日新聞1918, 9, 17)

## ②青年を中心に、差別からの解放をめざす動きの活発化

各地で親睦・共済・文化学習組織、小作争議・労働運動への参加

→差別糾弾・撤廃運動の広がり

→各地の部落解放運動の結合の進行



部落改善運動をすすめた大和  
同志会の機関紙



# 「全国水平社」の結成

## ①明治末年…社会問題（「細民」問題）への注目

→（同情）融和運動＝環境と生活の改善による差別を解消をめざす地域内外の運動。

## ②米騒動など…自らの行動による解放をめざす動き

「なぜ、自分たちが差別に対して卑屈になる必要があるのだろうか。そもそも、差別自身が間違いなのであって、自分たちは胸をはって差別は間違いであり、それを正すように主張すべきではないのか。」

## ③1922(大正11)年3月、**全国水平社**結成

**部落住民が自らの力で、部落問題を解決することをめざす**

「人の世に熱あれ。人間（じんかん）光りあれ。」



### 水平社宣言（抜粋）

吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ。

吾々は、かならず卑屈なる言葉と怯懦なる行爲によつて、祖先を辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ。そうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を勦はる事が何なんであるかをよく知つてゐる吾々は、心から人生の熱と光を願求禮讃するものである。

水平社は、かくして生れた。

人の世に熱あれ、人間に光あれ。

# 水平社設立大会～西光万吉の思い出

とにかく感動しましたな。みんな涙をポロポロこぼして…あんなことはちよっとありませぬね。といますと、それまでは、エタ、新平民などの名で賤視・差別されて、世の中からけもの扱われたいものが一堂に集まっただけ、おれも人間だと宣言したのですから、実に感動極まった声を挙げて泣きました。…今までの心の内にあったあきらめと卑屈の気持ちですが、あの大会で一ぺんに散ってしまったりけですよ。俺たちも人間だというこの判りきった言葉が、それまで言えなかつたんですから…あの大会の空気は口では言えませんが、





# 差別糾弾闘争と「人民的融和論」

①初期の水平社運動…差別発言をしたり、差別的行動した**個人に対する徹底的糾弾** 69件(22)→1046件(24)

⇒衝突(国粹会との争闘、自警団組織など)、警察の介入・弾圧

⇒その場限りの謝罪、かわりあいをする動き、反発した人たちの襲撃など、地域での摩擦の拡大

②差別の背景になっている**社会やその構造を問題視**

1)「**労農水**」**三角同盟**の提起…労働組合や農民運動との協働

2)軍隊内の差別の摘発、兵士の政治的自由要求など

3)高松差別裁判糾弾闘争(1933)…裁判所の差別的体質を糾弾

③「**人民的融和論**」(1935)

部落差別は**市民的権利と自由の問題**であり、人民諸階層との連帯と結合を通して、**差別の根拠となる体制の変革をめざす。**



# 小作争議と、農村の民主化 ～農民組合の結成と普通選挙～



大正期の農民たち（鹿児島県）



日農創立大会に集まった人びと



# 明治後期の農村の状態

## 地主小作関係と名望家支配

- ① **高額小作料**…副業(とくに養蚕)と出稼ぎ(女工・奉公人)などの現金収入によって維持
- ② **名望家支配**…地主などの有力者(名望家)が地方政治を独占、  
村政など地方政治を独占(背景にある制限選挙制度)
- ③ **半封建的な村落支配**…農村社会の停滞、中農も含めた無権利状態
- ④ 背景にある **農村の過剰人口(半失業状態)**  
⇒小作地への需要・手間賃の低廉



大正期の農民たち（鹿児島県）

# 大戦景気下の農村

## 寄生地主制の拡大と置き去りにされる農民

①好景気と米価など農産物価格の急騰＝地主は莫大な収入を獲得

⇒収益目的の土地投機発生＝寄生地主数が史上最高に

②中農のなかには成功者も⇒借金などの債務の出現

農業の都市向け農業(近郊農業)の成長、化学肥料による経営安定

③小作農は現物小作料の影響で恩恵をうけにくい

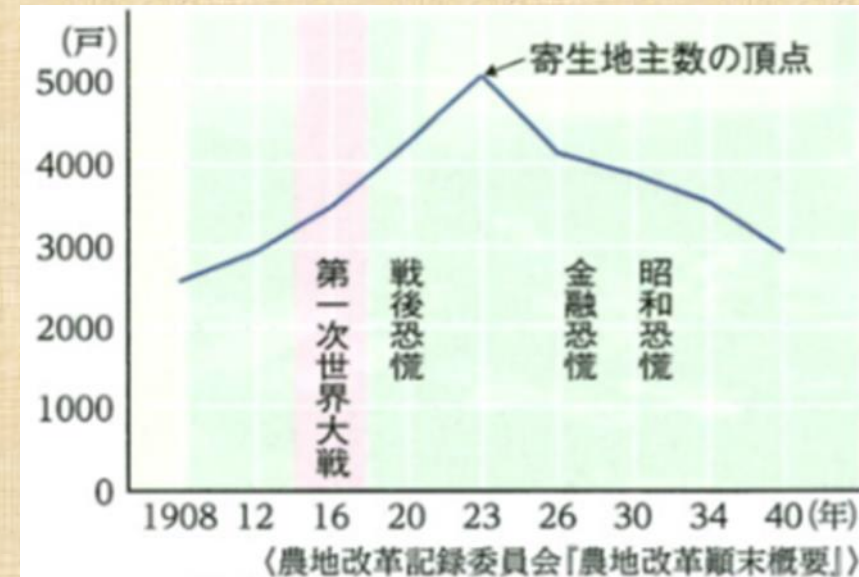
⇒米価急騰による生活苦＝米騒動の発生

⇒小作料引き下げの声の高まり

④都市における工業化の進行＝労働力の流出

⇒都市をめざす農民の増加＝農村人口減少

⇒手間賃の上昇＝小作地への需要低下



五十町歩以上の土地をもつ地主の数



# 農民の置かれた状況 せめて手間賃くらいの収入は…

1924（T13）年、岐阜の農民組合が農業の収支を計算してみた。

- ①産高2.1石＝84円(反当?)につき、小作料が1.5石＝60.2円(小作料約71%)、粗利＝24円
- ②必要経費が10円⇒賃金は換算されていない
- ③差引の収入は21.7円(0.54石)
- ④それを生産に要した日数で割ると、1日の収入は約90銭となる。
- ⑤ちなみに1924年の労働者の賃金は1円50銭  
村の手間賃水準が2円50銭。

農民は最低賃金の60%、自分たちが雇う農業労働者の賃金の36%分しかもらえない。

せめて他の業種の賃金並みの収入が得られるように小作料を引き下げを。

## 小作収支報告書(1924・岐阜)

出典：大門正克「近代日本と農村社会」

| 収入                              |       |        | 支出         |       |                |
|---------------------------------|-------|--------|------------|-------|----------------|
| (産高)<br>玄米2.1石                  | 84.00 |        | 小作料 1.5石   | 60.22 |                |
| 屑米                              | 0.91  |        | 種子代        | 0.50  | 1升25銭で2升       |
| その他                             | 6.90  | 藁その他一切 | 自給肥料       | 5.17  |                |
|                                 |       |        | 金肥         | 2.86  |                |
|                                 |       |        | 諸雑費        | 1.69  |                |
| 計                               | 91.81 |        | 計          | 70.22 |                |
| 米価＝40円/石で換算<br>1924年の米価         |       |        | 差引残        | 21.69 |                |
|                                 |       |        | 換算一人あたり手間賃 | 0.899 |                |
| ※岐阜県稲葉郡鶉村1924年（中部日本農民組合理由書添付資料） |       |        |            |       |                |
|                                 |       |        | 参考：農業手間賃   | 2.50  | 1924年<br>鶉村の水準 |
|                                 |       |        | 全国最低水準     | 1.50  | 組合の主張          |

# 大戦景気・工業化に伴う農村の変化

## (1) 大戦景気…人口の都市流出＝農村過剰人口の解消

- ① 農業労働にたいする賃金（「手間賃」）の高騰（⇒コスト意識に）
- ② 小作地への需要の低下（⇒小作地返上戦術も可能に）

## (2) 都市文化など流入…都市での生活・勤労体験、軍隊生活＋教育の普及

- ① 新思潮流入＝「人間の尊厳」「国民意識」「平等観」
- ② 労働運動の影響＝権利意識の向上（⇒高額小作料への疑問）

## (3) 地主＝村落指導層による旧来の支配への反発

- ① 高米価の独占
- ② 村政などの私物化、非民主化への反発
- ③ 近代化・自由化しつつある都市と比較して農村の「遅れ」

⇒ 小作争議の発生、地主＝名望家支配の弱体化へ



# 日本農民組合の結成

## ① 農民運動の発生

1916～7年岐阜県⇒関西、関東・新潟に広がる

小作人団体…173団体(1917)⇒1922年1340(1922)に

## ② 背景

穀物検査制度による負担増大、ロシア革命、米騒動、

労働組合の高揚、戦後恐慌による農民の生活悪化

社会主義思想・大正デモクラシー思想の農村への浸透

## ③ 1922年、賀川豊彦・杉山元治郎ら、日本農民組合結成！

## ④ 各地方で農民組合が設立⇒鳥取県・米子では1000人以上の聴衆

## ⑤ 日本農民組合創立の意味

それまで相互に連絡がなくバラバラに行われていた農民運動を相互に結びつけ、かつそれを単一の全国組織にまとめてあげていった。(中村政則)



賀川豊彦(1888～1960)  
牧師,社会運動家。兵庫県出身。神戸神学校在学中にキリスト教伝道活動にはいり,まずしい人々の救済につくす。大正8年友愛会関西労働同盟会の結成に参加。川崎・三菱造船所争議など労働組合運動,農民組合運動で活躍。のちふたたび布教活動にしたがう。戦後は社会党の結成に参加。。

# 杉山元治郎

## 『土地と自由』創刊の辞

地主を苦しめ、地主を倒せば、小作人がよくなるというのは大なる誤りである。(中略)互いに協調し、相互扶助せねばならぬ。

しかるに農業労働者の実際生活を見るに、「米つくり米食わず」とはなんという悲惨な矛盾であろう。

土地を耕し、肥料を与え、額に汗してつくりたる米の大部分は地主に納め、下級米や碎け米、合してわずか数ヶ月の食料を支えるに足りないとは、ここに何らの欠陥と間違いがないであろうか。

今や、時代思潮の推移と、農民自身の覚醒のため、農村社会問題が日に日に盛んになり、「小作人に土地を与えよ」との叫びはだんだん強くなってきたのである。われらはこの際、いよいよ農民の覚醒を促し、農村の向上発展を図り、引いては国家存立の安定を期さねばならない

(『土地と自由』大正11年1月)



### 杉山元治郎

(1885～1964)

農民運動家、政治家。大阪生まれ東北学院卒  
牧師となり農村伝道に従事。  
大正11年日本農民組合をつくり組合長となる。以来、労働農民党委員長、全国農民組合委員長をつとめた。  
昭和7年衆議院議員。



# 小作争議の活発化と農村の民主化

①戦後恐慌⇒日本農業の行き詰まり

米の輸移入の増加＝米価低下

②小作争議の急増

西日本中心、不在地主の村中心＝中農層の協力

③主な要求 1)小作料の引き下げ 2)耕作権の確保

小作地返還なども戦術に

⇒小作料三割削減などの事例も

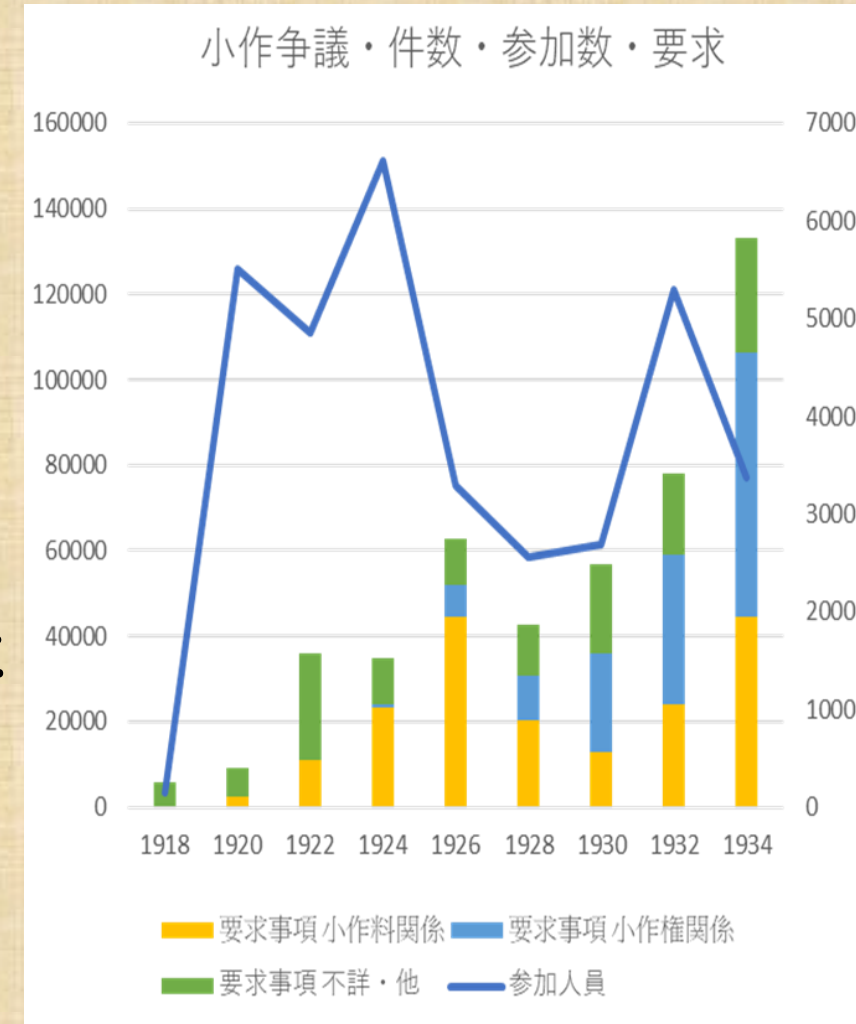
⇒要求の実現…臨時的な軽減から恒常的な軽減に

④規模の広がり⇒「村」の枠組をこえた広がり



⑤地主経営のリスク拡大＝銀行などの撤退

⑥村内の力関係の変化＝村の民主化の進展



# 村内の民主化＝普通選挙の拡大・文化運動

## (1) 男子普通選挙の先行的実現

1921町村議会選挙、23農会総代選挙、25普選法（衆院選挙）

- ① 小作など貧農や自作など中農層の村政進出＝名望家支配を解体
- ② 農村の民主化進行…有力地主の半封建的支配に対する共同戦線の形成＝とくに不在地主の集落で顕著
- ③ 民主化の担い手としての農民組合の影響力の拡大

## (2) 文化運動の広がり＝教養のデモクラシー

- ① 上田自由大学(1921～)…自主的な活動単位としての青年団

タカクラテルら多くの進歩的文化人が講師を務める⇒県下に広がる

- ② 木崎農民学校(1926)…争議中の農民組合員が建設をめざす。



### 木崎村無産農民学校

木崎村の争議団は小学校同盟休校を決行、自主的な農民小学校を発足させた。壇上の講師は大宅壮一



# 「従来の構造では対応できない」時代 日露戦争後～大正という時代とは

- ① 農業中心・農村中心の社会⇒商工業中心・都市中心の大衆社会に  
社会の変化＝さまざまな諸階級・階層・グループ(＝「民衆」)の要求が噴出  
新聞などのメディアの影響力の拡大、教育の普及＝識字率の高まり
- ② 多様な生き方・価値観の出現＝これまでのあり方(「明治の精神」)への異議申し立て  
人間の尊厳(ヒューマニズム)、個人主義、自由主義⇔天皇制・「家」・「忠孝」
- ③ 「国民」意識の実質化…「国民になる・させられる」  
⇒「国民の要求」「あるべき日本」を求める  
民本主義(＝国民を主とした政治を要求)、「一視同仁」(＝天皇の下での平等)など
- ④ 人間の尊厳、同じ「国民」との視点からの社会問題の可視化・顕在化＝解決策の模索  
労働問題・小作問題・政治参加  
女性問題・部落問題・公害・衛生・健康・貧困・住宅などなど

「国民」の名のもと「さまざまな階層が、旧来の社会構造と秩序に対抗」  
⇒国民が国民として扱われない状況に異議申し立て  
⇒他方、正式な「国民」として認められないものへの排除、制限も

# 参考文献

武田晴人『帝国主義と民本主義』

鹿野政直『大正デモクラシー』

中村政則『労働者と農民』

松尾尊兌『大正デモクラシー』『大正デモクラシーの研究』

『民本主義の潮流』

成田龍一『大正デモクラシー』

金原左門編『日本民衆の歴史Ⅶ』

大門正克『近代日本と農村社会』

有山輝雄他『メディア史を学ぶ人のために』

部落問題研究所『部落の歴史と解放運動(近現代編)』

アンドルー＝ゴードン「戦前日本の大衆政治行動と意識をさぐって」